

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.276

2016年5月

平成28年度入学式を挙



目次

●ニュース

| | |
|-----------------------------------|----|
| 平成28年度入学式を挙 | 3 |
| 松尾総長と天野 浩教授がモンゴルを訪問 | 12 |
| 名古屋大学オープンレクチャー2016を開催 | 13 |
| 第52回経営協議会を開催 | 13 |
| 東芝四日市工場と産学連携に関する協定を締結 | 14 |
| UBIAS ICA 名古屋ワークショップを開催 | 14 |
| 第1回全国リーディングプログラム合同女子会を開催 | 15 |
| ワークショップ「大学の研究力・研究マネジメント強化に向けて」を開催 | 15 |
| 平成28年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決まる | 16 |
| 第4回水田賞授賞式を挙 | 16 |

●知の未来へ

| | |
|-----------------------------|----|
| リン酸化プロテオミクス解析を用いたドーパミン機能の解明 | 17 |
| 黒田 啓介（大学院医学系研究科特任助教） | |

●知の先端

| | |
|--------------------|----|
| 加齢黄斑変性の新規治療法開発 | 18 |
| 寺崎 浩子（大学院医学系研究科教授） | |

●部局ニュース

| | |
|--|----|
| 明日の医療の質向上をリードする医師養成プログラム（ASUISHI）第1期生 が修了 | 20 |
| 公開シンポジウム「人文学がつなぐ社会」を開催 | 21 |
| 岡崎恒子名誉教授文化功労者顕彰を祝す会を開催 | 21 |
| ICCAE 第4回オープンセミナーを開催 | 22 |
| 第32回企画展「ボタニカルアート作品展 同時開催 伊藤篤太郎誕生150年」を 開催 | 22 |
| ミクロの探検隊®を開催 | 23 |
| 2008ノーベル賞展示室 来館者5万人突破の記念式典を挙 | 23 |

●新名誉教授のことば

| | |
|---------------|----|
| ●名大を表敬訪問された方々 | 27 |
|---------------|----|

●新たに締結した学術交流協定

| | |
|--------------|----|
| ●構成員を対象とした研修 | 28 |
|--------------|----|

●新任役員の紹介

| | |
|------------|----|
| ●新任部局長等の紹介 | 29 |
|------------|----|

●資 料

| | |
|---------------------------------|----|
| ●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成28年3月16日～4月15日 | 34 |
|---------------------------------|----|

●INFORMATION

| | |
|----------------------------|----|
| 第57回名大祭を6月2日(木)～6月5日(日)に開催 | 37 |
|----------------------------|----|

●イベントカレンダー

| | |
|----------|----|
| ●ちょっと名大史 | 38 |
|----------|----|

| | |
|----------|----|
| 院校払い下げ騒擾 | 40 |
|----------|----|

平成28年度入学式を挙





平成28年度名古屋大学入学式が、4月5日(火)、豊田講堂において大学院は午前9時30分から、学部は文、法、経済、理、医学部を対象に午前11時から、教育、情報文化、工、農学部を対象に午後1時からそれぞれ挙行されました。

今年度の入学生は、大学院2,206名(修士課程及び博士課程前期課程1,671名、大学院法学研究科専門職学位課程(法科大学院)21名、医学博士課程及び博士課程後期課程514名)及び学部2,197名の計4,403名です。

名古屋大学交響楽団が演奏する「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲(ワグナー作曲)で始まった式典では、松尾総長から、大学院入学生及び学部入学生それぞれに対する祝辞が述べられました(詳しくは総長の辞をご覧ください)。

次に、各研究科長、学部長等の紹介があった後、大学院多元数理科学研究科博士課程前期課程入学生の澁谷奎悟さん、医学部入学生の近藤 諒さん及び工学部入学生の杉山和樹さんが、入学生総代として、入学にあたり本学の学生としての本分を全うすることを宣



誓しました。

続いて、名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎トヨタ自動車株式会社名誉会長から祝辞をいただきました(詳しくは来賓祝辞をご覧ください)。

最後に、名古屋大学混声合唱団が歓迎の歌を合唱し、名古屋大学交響楽団による「交響曲第1番第4楽章」(ブラームス作曲)の演奏とともに、式典は幕を閉じました。

式典終了後には、豊田講堂の前庭に詰めかけた大勢の学生から、部活やサークルの勧誘を受けたり、家族などと晴れやかな表情で記念撮影をしたりする入学生の姿が見られました。

その後、同会場で学部入学生を対象として、学生による「入学祭典」と称したサークル紹介が行われました。様々なサークルによる趣向を凝らしたステージパフォーマンスに、会場は大いに盛り上がりました。

入学式の様子は、経済学部カンファレンスホール及びIB電子情報館大講義室、また、本学ホームページ上においてライブ中継され、多くの方々がこの晴れがましい式典に臨みました。

なお、入学式の模様は、現在、本学のホームページ(<http://www.nagoya-u.ac.jp/info/28.html>)で視聴することができます。

平成28年度大学院入学式祝辞

名古屋大学総長 松尾 清一

皆さん、名古屋大学大学院への進学、おめでとうございます。本日ここに、2,206名の皆さんを名古屋大学大学院に迎えることができました。名古屋大学を代表して、心から祝福し、歓迎いたします。

皆さんは、今、これから始まる大学院生活に、熱い思いと期待を胸に抱いていることと思います。名古屋大学大学院で、これから新しい一歩を踏み出そうとしている皆さんに、総長として、また大学院の先輩として私から応援のメッセージを贈りたいと思います。

第一に、これからの大学院生活では、新しい自分を創造して行ってほしいと思います。そのために、積極的に物事に立ち向かう勇気と、自分自身を鍛える厳しさを持つてほしいのです。皆さんが、自分の選んだ研究テーマを、悔いを残さず徹底的に追求すること、平たく言えば面白いと思ったことや疑問を大事にして徹底的に研究すること、これは皆さんの自分らしさ、すなわちアイデンティティーをつくる基礎になります。

本学特別教授である赤崎 勇特別教授と天野 浩教授は、ガリウムナイトライド (GaN) による青色LEDの発明という快挙を成し遂げ、ノーベル物理学賞を受賞されました。そこには、周りの状況に左右されずひたすら自らの研究テーマを追求し続けた、ぶれない生き方が明確に示されています。赤崎特別教授の、「われ一人、荒野を行く」という言葉には、その思いが込められています。そしてそのようなプロセスを経験することで、皆さん一人ひとりが自分という人間の形を作る、すなわち皆さんの自分らしさを作ることになるのだと思います。

私が座右の銘としている言葉があります。「安定は動の中にあり」という言葉です。この言葉は、私の高校時代の国語の先生から教わったものです。この言葉を聞いたときに、私の心の中に強く響くものがありました。これまでの人生の様々な経験の中で、「積極的に動けば、何かが変わる」、「慎重になって結局動かなかったときは、後で強く後悔する」ということを、自分自身の感覚として持つようになりました。最近では特に、この言葉を、一層強く意識するようになりました。

失敗を恐れず、まずはやってみる。成功しても失敗しても、そこからまた新しい世界が見える。そしてそこでは、新しい人、新しい考え方に出会えるのです。その結果、より高いレベルの安定が得られることになるのです。勿論、これには多くの苦勞が伴います。しかしその苦勞は、きっと後になって大きく報われることになるでしょう。



世界を大きく変えた発明家のトーマス・エジソンは、「Our greatest weakness lies in giving up. The most certain way to succeed is always to try just one more time. (我々の一番の弱みは、あきらめること。成功するためには、とにかくもう一度チャレンジしてみることだ)」と、言っています。数多くの失敗を糧に、あきらめずにチャレンジし続けたものが、成功にたどり着くのです。

私は偶然の発見や成功はない、と思っています。いつも目標を持って自らを鍛えていないと、偶然の出来事も見逃され、大事なものが手からこぼれてしまうのです。その意味で、常に意識し、努力して、偶然のチャンスをつかみ損ねないようにすることが大事だと思います。天野教授が、何千回の失敗を乗り越えた結果、大きな発明にたどり着いたことは、「必然が生んだ偶然」といえるでしょう。今まさに皆さんは、最も知的で、エキサイティングで、かつタフな世界に飛び込もうとしているのです。心躍らせて、研生活を楽しんでいただきたいと思います。

次に、皆さんに伝えたいことは、「自分の狭い専門領域に閉じこもらずに、視野を大きく持って、新しい研究にチャレンジしてもらいたい」ということです。

世界は今、多様な価値観や異なる文化が交錯し、目覚ましい勢いでグローバル化が進んでいます。それに伴い、これまでの常識では想像できなかった、様々な矛盾や問題が噴出しています。また、我が国では、世界でも類をみない超高齢社会がすでに到来しており、国の将来に対する不安が広がっています。国の内外で、解決すべき課題は山積しています。皆さんには、どのような専門領域に進もうと、ぜひ高い志を持って、このような人類的な課題に、果敢にチャレンジしてほしいと思います。

人類が直面している複雑で困難な課題を解決するためには、これまでの縦割りの思考方法ではなく、異分野の連携ないし融合による新しい考え方や研究方法が不可欠です。

現代においては、このような手法やシステムによって、新しい成果が続々と報告されています。それらの研究成果は、私たちの社会を大きく変えるもの、あるいは変える可能性があるものになっています。様々な領域の多彩な研究者と連携する事は、新しい価値の創造という観点からは、極めて重要なことです。皆さんにはぜひ、大きな視点を持ち、ダイナミックに研究を進めていただきたいと思います。

さて、今お話ししたことは、広い意味で「多様性の許容と共働による創造」ということにつながります。名古屋大学には大学院も含めて、学生だけで約16,000名、教職員も含めると約2万名以上の人々が活動しています。多彩なバックグラウンドと能力を持つ人々が集まり、また、わが国だけでなく海外の多くの大学、研究機関、企業とも活発に交流しています。このような環境の中で、多種多様な研究者が連携して行う、分野を超えた学際的な研究は急速に増えており、大きな成果を挙げつつあります。これらの活動は、新しい価値を創造する知的な成果を生み、ひいては実社会を大きく変えていく原動力にもなると思います。

これからの社会において、多様性がますます重要性であることは言うまでもありませんが、名古屋大学は多様な専門領域間の連携に加えて、男女共同参画の推進や外国人留学生の受け入れを増加させるなど、多様性に富むキャンパスを創ってきました。ジェンダー、国籍、人種、文化、歴史、考え方の違いなど、多くの壁を乗り越えて、お互いに理解しながら問題解決のために協力することは、極めて生産的であり重要です。これらの具体的な取り組みが、名古屋大学では先進的かつ実験的に行われています。

皆さんにはぜひ、名古屋大学で多様性 = diversity を肌で感じていただくと同時に、このメリットを存分に生かしてもらいたいと思います。

そのような取り組みの一つとして、リーディング大学院があります。これは大学院生が、自分の専門領域で正規の課程を行いながら、同時に、国際性やコミュニケーション能力を磨くための様々なイベントへの参加、多様な人たちとの交流、社会的に活躍しているリーダーとの対話などを通して課題解決に挑むことによって、国際的に活躍できるリーダーを育てるプログラムです。正規課程をこなしながらのプログラムであるので、エントリーした学生には負荷がかかるわけですが、参加した学生はより一層、大きく成長しているようです。「自分を鍛える」という意味では、極めてチャレンジングなプログラムであり、ぜひ皆さんも積極的に挑戦してください。



名古屋大学はその歴史の中で、学界、産業界をはじめ多彩な分野で数多くの人材を輩出し、人類の幸福の実現、そして我が国と世界の発展に大きな貢献をしてきました。21世紀に入ってからノーベル賞を受賞された6名の研究者をはじめとして、学界では先駆的な業績を挙げた多くの研究者を輩出しています。また産業界では、本日ご臨席をいただいておりますトヨタ自動車株式会社名誉会長で、名古屋大学全学同窓会会長でもいらっしゃいます豊田章一郎様はじめ、日本の経済や社会を牽引するリーダー人材を綺羅星のごとく輩出してきました。

その根底には、名古屋大学の持つ自由闊達な学風があり、名古屋大学で育った人材は勇気ある知識人として、人類の幸福と社会の発展のために貢献するという伝統があると思います。

名古屋大学はこれまで、地元各界の皆様の熱烈な想いと教職員のたゆまぬ努力により、地域の大学から日本の中核大学へと発展してきました。そして今、世界有数の大学を目指して羽ばたこうとしています。どうか皆さんも、このような伝統に後押しされながら、皆さん自身の新しいチャレンジをしてください。

アイルランドの劇作家でノーベル文学賞受賞者でもあるバーナード・ショーはこう言っています。「Life isn't about finding yourself. Life is about creating yourself. (人生とは自分を見つけることではない。人生とは自分を創ることである)」。

皆さんが名古屋大学大学院で過ごすこれからの時間は、まさに自分を鍛えて大きくする絶好のチャンスです。皆さんには、ぜひ勇気と希望を持って前に進んでほしいと思います。

名古屋大学での大学院生活が皆さんにとって、実り多く充実したものとなるよう、強い願いを込めて、私からの祝辞といたします。本日は本当におめでとう。

平成28年度学部入学式祝辞

名古屋大学総長 松尾 清一

新入生の皆さん、名古屋大学への入学、おめでとうございます。本日ここに、2,197名の学部学生を新しい仲間として名古屋大学に迎えることができました。名古屋大学を代表して、心から祝福し、歓迎いたします。皆さんは、大学受験という厳しい試練を乗り越えて、名古屋大学に入学しました。合格発表後のリラックスした気分も徐々に消え、今は、これから始まる名古屋大学での学生生活に思いを馳せ、夢と期待に胸を膨らませていることと思います。

皆さんが、名古屋大学で新しい生活を始めるにあたり、総長として、また大学の先輩として、私から応援のメッセージを皆さんに贈りたいと思います。

名古屋大学の歴史を紐解くと、その源流は1871年（明治4年）に創設された仮医学校・仮病院にさかのぼります。この年を名古屋大学の創基としています。また、1939年に我が国で最後の帝国大学として総合大学の歴史が始まり、これを名古屋大学の開学の年としています。その後、紆余曲折を経て今日に至っていますが、この間多くの先輩たちが、名古屋大学を地方の大学から国の拠点大学へ、そして日本の大学から世界の大学へと飛躍させるべく、日夜努力を重ねてきました。

名古屋大学は特に21世紀に入ってから、大きく花開きました。学術研究では、21世紀に入ってからノーベル賞を受賞した日本人13名のうち6名の方が名古屋大学に関係する研究者であり、これは世界的に見ても特筆すべき事実です。また、このような素晴らしい先達に続く、前途有望な若手及び中堅の研究者の育成にも力を入れており、彼らは、素晴らしい研究成果を挙げつつあります。

一方で、名古屋大学の特徴である「自由闊達な学風」の下で教育を受けた卒業生は、「勇気ある知識人」として、産業界を中心に素晴らしい活躍をしています。その中には、本日まで来賓としてお招きしておりますトヨタ自動車株式会社名誉会長で名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎様はじめ、リーダー中のリーダーとして、日本の経済と社会を牽引している方が綺羅星のごとくおられます。これは、名古屋大学がこれまで教育と研究を通じて、日本と世界の発展に貢献してきた証左の一端であろうかと思えます。

名古屋大学の理念は、2000年に制定された名古屋大学の憲法ともいえる学術憲章で定めており、その使命を「基幹総合大学として、人間と社会と自然に関する研究と教育を通じて、人々の幸福に貢献すること」としています。また、世界、アジア、そして地域において、人類社会に貢献することを明確に謳っています。この理念は今日でも燦然と輝



いています。皆さんにはぜひ、入学を機に学術憲章を読んでもいただきたいと思います。このような名古屋大学で、これから新しい生活を始める新入生の皆さんに、ぜひ二つのことを考えていただきたいと思います。

第一に、これからの名古屋大学での学生生活を通して、積極的に皆さん自身を創造して欲しい、創り上げて欲しいということです。

アイルランドの劇作家でノーベル文学賞受賞者でもあるバーナード・ショーはこう言っています。「Life isn't about finding yourself. Life is about creating yourself. (人生とは自分を見つけることではない。人生とは自分を創ることである)」。

自分はどこからきて、どこへ行くのだろうかという自分探しの旅ではなく、未来に向かってどのような人間になるか、人や社会のためにどのような貢献をするかを、積極的に考える学生生活であってほしいと思います。徹底的に未来志向であってほしいと願っています。皆さんが将来どのような道に進むにしろ、最終的にはそれぞれの専門性を活かして、様々な分野でリーダーシップを発揮しながら、人類や社会に貢献する事が最終的なゴールであると考えています。その基礎を作るために、まず、総合大学で学ぶということの醍醐味を、皆さん自身の中でしっかりと体感してほしいのです。

名古屋大学では、高い専門性はもちろんのこと、幅広い視野と教養を備え、社会貢献の高い志を持ち、グローバルにリーダーシップを発揮できる人材を育成したいと考えています。そのために、全学部の教員が参加して、全学教育科目を実施しています。学部を問わず、知識人として必要な共通の課題を取り上げて教育を実施し、総合大学ならではのダイナミックな教育が展開されているのです。皆さんには、ぜひ、自ら積極的に、そしてまた思う存分、広大で深遠な学問の香りを胸いっぱい吸い込んでいただきたいと思います。

その上で、最終的な目標である人類や社会に貢献するというこの意味を考え、その喜びと困難さを体験し、これからの人生で自分がチャレンジすべき課題を探求し、専門分野の選択と実践を行い、国内・海外を含めて多くの体験をするなど、試行錯誤しながら一步一步、成長してください。

今一つのアドバイスは、多様性を理解し、許容し、そして共働によって新しい価値を創造していく基礎を、この名古屋大学で培ってほしいということです。

今後、人類の幸福と持続可能な社会を実現するために、多様性がますます重要性であることは言うまでもありませんが、名古屋大学は、多様な専門領域間の連携に加えて、男女共同参画の推進や、外国人留学生の受け入れを増加させるなど、多様性に富むキャンパスを創ってきました。

ジェンダー、国籍、人種、文化、歴史、考え方の違いなど、多くの壁を乗り越えて、お互いに理解しながら問題解決のために協力することは、極めて生産的であり重要です。これらの具体的なチャレンジが、名古屋大学では先進的かつ実験的に行われています。名古屋大学は多様性＝diversityに溢れています。皆さんはこれまでにない多くの体験をすることでしょう。そのような中で自分の未来を考え、学問を修め、自分を鍛えて大きくなってください。

多様化の一環として名古屋大学では、国際化を強力に進めています。国際化は、世界有数の大学を目指す名古屋大学にとって、極めて重要な柱であるだけでなく、皆さんを高める有効な手段でもあります。名古屋大学のキャンパスは年々、国際色が強くなっています。欧米の大学はもとより、名古屋大学は早い時期からアジア諸国との交流にも力を注いできました。留学生の受け入れも積極的に行っており、現在、名古屋大学の全学生約16,000名のうち留学生の割合は約14%、約2,000名に達しています。

一方で、名古屋大学から海外に正規留学する学生も年々増加し、昨年度は短期・長期併せて700名を超える学生が海外で学ぶ機会を得ています。直接、海外に触れるということは皆さんにとって、大変大きなインパクトがあります。今後、すべての名大生が、在学中に留学を経験できるよう、名古屋大学では支援体制や留学システムを充実していきたいと思っています。また、皆さんも、様々なチャンスを利用して、積極的に前に進んでほしいと思っています。

さて、私が座右の銘としている言葉があります。「安定は動の中にあり」という言葉です。この言葉は、私の高校

時代の国語の先生から教わったものです。この言葉を聞いたときに、私の心の中に強く響くものがありました。これまでの人生の様々な経験の中で、「積極的に動けば、何かが変わる」、「慎重になって動かなかったときは、後で大いに後悔する」ということを、自分自身の感覚として持つようになりました。最近では特に、この言葉を強く意識するようになりました。失敗を恐れず、まずはやってみる。成功しても失敗しても、そこからはまた新しい世界が見える。そしてそこでは、新しい人、新しい考え方に出会えるのです。その結果、より高いレベルの安定が得られることになるのです。勿論、これには多くの苦勞が伴います。しかしその苦勞は、きっと後になって大きく報われることになるでしょう。

世界は今、多様な価値観や異なる文化が交錯し、目覚ましい勢いでグローバル化が進んでいます。それに伴い、これまでの常識では想像できなかった、様々な矛盾や問題が噴出しています。また、我が国では、世界でも類をみない超高齢社会がすでに到来しており、国の将来に対する不安が広がっています。国の内外で、解決すべき課題は山積んでいます。

皆さんには将来、困難な課題に果敢に挑む人材に成長してもらいたいと、切に願っています。この名古屋大学で、勉学に励み専門性を高めるとともに、高い志と幅広い視野、多様性を理解し受け入れる広い心、そして目標を実現するためのコミュニケーション能力とリーダーシップを身につけてください。

名古屋大学での学生生活が皆さんにとって、実り多く充実したものになるよう、強い願いを込めて、私からの祝辞といたします。本日は本当におめでとうございます。



来賓祝辞（平成28年度大学院入学式）

豊田 章一郎 名古屋大学全学同窓会会長
トヨタ自動車株式会社名誉会長



本日は、名古屋大学大学院の入学式にお招きいただきまして、誠に有難うございます。名古屋大学全学同窓会を代表しまして、本日ご入学されました皆様に、心よりお祝い申し上げます。

さて、皆様をご入学されました名古屋大学は、昭和14年、1939年に創立以来、自由闊達な学風を誇り、豊かな人間性を持つ勇気ある知識人の育成を学術憲章に掲げております。この学風からは、6人のノーベル賞受賞者をはじめとして、科学、医学、人文、社会科学などの幅広い分野で、世界をリードする多くの研究者の方々を輩出しておられます。また、中部地区の基幹総合大学として、ものづくり中部、ものづくり日本を担う人材をはじめ、幾多の分野で幅広く有為な人材を輩出してまいりましたことは、皆様もすでにご承知の通りでございます。

しかし、世界ではグローバル化とイノベーションが急速に進展し、日本は、産業・企業だけでなく、大学もグローバルな競争の真っ只中にあるわけでございます。

そして現在、松尾総長のリーダーシップの下、NU MIRAI

2020「名古屋大学を世界屈指の研究大学に」という松尾イニシアティブに従って、世界に通じる人材の育成や世界トップレベルの研究推進などをはじめとする大学の国際化を強力に進めておられます。

このように、名古屋大学は、皆様の期待に十分応えてくれる大学及び大学院であると確信しております。

皆様には、決して現状に安住することなく、名古屋大学の恵まれた教育環境を自分のものとして十分に活かし、「世界の中の日本」という視点に立って、常に視野を広く持ち、高い目標を掲げて行動し、知力、体力、気力の充実を図っていただきたいと思います。

特に、将来の日本を担うリーダーとしての役割が期待されております皆様には、学生生活を通して、高い志や、他に謙虚に学ぶ姿勢、そして思いやりの心といったもの大切さを、しっかりと掴み取っていただきたいと思っております。





さて、名古屋大学全学同窓会は、平成14年10月に発足し、設立後14年目を迎えております。国内には、関東支部、関西支部及び浜松を中心とした遠州会の3つの支部がございます。また、海外には、名古屋大学で学ばれた留学生の方々が中心となりまして、韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、台湾、ラオス、ミャンマー、インドネシア、フィリピンに加え、今年の2月にはマレーシアの合計15の支部を設立しております。一昨年のマニラで開催されましたフィリピン支部設立には私も参加して参りました。海外支部におられる名古屋大学への留学経験をお持ちの同窓生の皆様は、本国で大変活躍されており、名古屋大学への思いが深く、支部設立を大変喜んでおられました。

毎年10月に開催されるホームカミングデーでは、設立直後の海外支部の代表者をお招きして、歓迎交流会を総長にご参加いただき開催しています。今年も10月14日にマレーシア支部の支部長をお呼びして開催する予定です。

今後、名古屋大学がアジア地域との関係強化を図る際の拠点として、これらの同窓会支部との交流を積極的に進め

ているところでございます。

名古屋大学全学同窓会の準会員でございます皆様にも、今後留学などで、これらの支部と積極的に交流していただき、名古屋大学の国際的なネットワークを是非広げていただきたいと思っております。

私ども全学同窓会も、名古屋大学が、研究、教育、社会貢献の各方面で、日本はもとより、世界屈指の国際競争力を持った大学となるように皆様と一緒に活動してまいりたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

最後に、皆様のこれからの学生生活が楽しく、充実したものになりますことを心から祈念いたしましてお祝の言葉とさせていただきます。本日は本当におめでとうございました。どうぞ頑張ってください。



来賓祝辞（平成28年度学部入学式）

豊田 章一郎 名古屋大学全学同窓会会長
トヨタ自動車株式会社名誉会長



本日は、名古屋大学の入学式にお招きいただきまして、誠に有難うございます。名古屋大学全学同窓会を代表しまして、本日も入学されました皆様に、心よりお祝い申し上げます。

さて、今、皆様は、大変フレッシュな気持ちで、この場に集まっておられると思います。私も、先ほどから、緊張の中にも、若さと希望にあふれた皆様のお顔を拝見いたしまして、非常に爽やかな気持ちが致しております。

これから新たに大学生活に入られる皆様は、大きな夢や期待を胸に、新しいことにどんどんチャレンジしていこうと思っておられることでしょう。

名古屋大学には、総合大学としまして、自然科学から社会科学、人文科学まで、いずれも世界トップレベルの教授陣を擁し、充実した魅力ある学部、研究科、講座がそろっております。さらに、創立以来、独創性豊かで自由闊達、清新な学風は、良き伝統として今日まで脈々と受け継がれてきております。名古屋大学関係者から6名のノーベル賞受賞者が輩出されていることからこのことが分かります。

そして現在、松尾総長のリーダーシップの下、NU MIRAI 2020「名古屋大学を世界屈指の研究大学に」という松尾イニシアティブに従って、世界に通じる人材の育成や世界トップレベルの研究推進などをはじめとする大学の国際化を強力に進めておられます。

このように、名古屋大学は、皆様の期待に十分応えてくれる大学であると確信しております。

皆様も、決して現状に安住することなく、名古屋大学の恵まれた教育環境を自分のものとして十分に活かし、「世界の中の日本」という視点に立ちまして、常に視野を広く持ち、高い目標を掲げて行動し、知力、体力、気力の充実を図っていただきたいと思います。

特に、将来の日本を担うリーダーとしての役割が期待されております皆様には、学生生活を通して、高い志や、他に謙虚に学ぶ姿勢、そして思いやりの心といったもの大切さを、しっかりと掴み取っていただきたいと思います。



さて、名古屋大学全学同窓会は、平成14年10月に発足し、設立後14年目を迎えております。国内には、関東支部、関西支部及び浜松を中心とした遠州会の3つの支部がございます。また、海外には、名古屋大学で学ばれた留学生の方々を中心となりまして、韓国、バングラデシュ、上海、タイ、北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、台湾、ラオス、ミャンマー、インドネシア、フィリピンに加え、今年の2月にはマレーシアの合計15の支部を設立しております。一昨年のマニラで開催されましたフィリピン支部設立には私も参加して参りました。海外支部におられる名古屋大学への留学経験をお持ちの同窓生の皆様は、大変活躍されており、名古屋大学への思いが深く、支部設立を大変喜んでおられました。今後、名古屋大学がアジア地域との関係強化を図る際の拠点といたしまして、これらの同窓会支部との交流を積極的に進めているところでございます。

皆様は、今日から名古屋大学全学同窓会の準会員となりますが、皆様にも、今後留学などで、これらの支部と積

極的に交流していただき、名古屋大学の国際的なネットワークを是非広げていただきたいと思います。お待ちしております。

私ども全学同窓会も、名古屋大学が、研究、教育、社会貢献の各方面で、日本はもとより、世界屈指の国際競争力を持った大学となるように皆様と一緒に活動してまいりたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

最後に、皆様のこれからの学生生活が楽しく、充実したものになりますことを心から祈念いたしましてお祝の言葉とさせていただきます。本日は本当におめでとうございました。どうぞ、頑張ってください。

松尾総長と天野 浩教授がモンゴルを訪問

モンゴル教育文化科学省の招へいにより、松尾総長は、天野 浩未来材料・システム研究所教授とともに、3月27日(日)から30日(水)までの4日間、モンゴルを訪問しました。

モンゴル教育文化科学省と本学は、昨年2月、ロブサンニヤム・ガントゥムル モンゴル教育文化科学大臣の本学への招へいをはじめ、昨年7月には文部科学省新世紀国際教育交流プロジェクト・行政官等受入事業として、ナサンバヤル モンゴル教育文化科学省戦略政策予算局長等を招へいするなど、積極的な交流を行ってきました。

28日(月)には、チメド・サイハンビレグ モンゴル国首相及びガントゥムル教育文化科学大臣を表敬訪問の後、トゥーシンホテルにおいて「世界を照らすLED」と題した天野教授による講演会が開催されました。講演会には、ガントゥムル教育文化科学大臣、菊池 稔在モンゴル国日本国大使館参事官、バト・エルデネ モンゴル国立大学長、オチルバト モンゴル科学技術大学長をはじめ、参加者は600名を超えました。講演に先立ち、ガントゥムル教育文化科学大臣から、青色LEDの発明により、モンゴルの若



ガントゥムル教育文化科学大臣との記念撮影（前列左から2人目）

い世代に新しい光源が与られたことへの感謝の言葉が述べられました。次いで、総長から本学の紹介を含めたあいさつの後、天野教授により、ノーベル物理学賞受賞発表からストックホルムでのノーベルウィークまでのエピソード、青色LEDを発明するまでの過程、発明がもたらした効果、今後の活用例の紹介など、今後モンゴル国の発展を支える若い世代へのメッセージとして講演が行われました。講演後の質疑応答では、青色LED開発に関する質問から研究以外のことについてまで、多くの学生から質問がありました。

翌29日(火)午前は、ゲルでの生活で青色LEDを利用している家族を訪問した後、午後には、モンゴル国立大学から天野教授に名誉博士号が授与されました。その後、日本法教育研究センター、フィールドリサーチセンター、レジリエンス共同研究センターなど、モンゴル国内の大学との協力により設置されている本学の施設を視察しました。滞在中は、多数の取材を受け、現地の新聞やテレビなどでも報道されました。



天野教授の講演の様子

名古屋大学オープンレクチャー2016を開催

名古屋大学オープンレクチャー2016が、3月21日（月・祝）、本学において開催されました。本レクチャーは本学で行われている先端研究について少人数の講義により一般の方に紹介するもので、今回は208名が参加しました。

はじめに本学の概要説明が行われ、その後、各講義室で講義が行われました。絵巻の解説を行う「絵解き」の再現



静電気を使ったデモを行う中村教授

や研究室見学など趣向を凝らした講義があり、参加者からは「プラズマが医療に役立つことは意外であった」、「コウモリの公衆衛生や感染症とのつながりに、なるほどと思った」、「ニュースを見ているだけでは気づかなかった研究者の視点、法制度上の見方がわかった」などの声や、「明日から社会を違った視点で見ることができそう」、「博物館に行きたくなくなった」などの感想もありました。参加者アンケートでは96%の方が満足、やや満足と回答があり、参加者は本学の研究の幅広さを知る機会になったようです。

なお、今回開講された講義は「現代の難民問題についてはなし」（浅川晃広国際開発研究科 講師）、「身近なプラズマのはなし」（石川健治工学研究科附属プラズマナノ工学研究センター特任教授）、「食物や植物が地獄に落ちて、苦しむ絵巻のはなし」（伊藤信博国際言語文化研究科助教）、「Twitterで読み解く人間行動のはなし」（笹原和俊情報科学研究科助教）、「役に立つ？ 素粒子-軽すぎるニュートリノと宇宙線による大型構造物の透視-」（中村光廣未来材料・システム研究所教授）、「コウモリと私たちの生活のはなし」（本道栄一生命農学研究科教授）の6講義でした。

第52回経営協議会を開催

第52回経営協議会が、3月17日（木）、鶴舞地区の鶴友会館において開催されました。

会議では、松尾総長からあいさつの後、第3期中期目標・中期計画、平成28年度入学者選抜実施状況、名古屋大学基金、土地交換による不動産取得について、総長、各担当理事及び副総長から報告が行われました。



会議の様子

次いで、執行部の職務分担等、平成28年度学内予算配分（案）、平成28事業年度における長期借入金の借入れ及び償還計画等、平成28年度計画、工学部・工学研究科の改編、情報学部・情報学研究科（仮称）の設置、人文学研究科（仮称）の設置について説明が行われ、審議の結果、了承されました。

東芝四日市工場と産学連携に関する協定を締結

本学と株式会社東芝四日市工場は、両者間の研究、情報交換、人材交流活動を相互連携のうえで推進することを目的に4月13日(水)、協定を締結しました。東芝の半導体部門は、世界をリードする最先端メモリ技術開発を行うことを目指しており、近年、その機能を四日市工場に集約しました。本学と東芝四日市工場は、これまで個別の共同研究



調印式後の記念撮影（中央：松尾総長と松下工場長）

や産学共同研究講座の設置により連携してきたところですが、それをより一層深め、さらなる連携強化を図るため、今回連携協定を締結することになりました。

当日は、松尾総長、財満副総長、堀 勝未来社会創造機構教授が東芝四日市工場を訪れ、調印式に先立ち最先端メモリの製造工場を視察しました。最先端のメモリは、数～10数mmのチップ上に数百億個以上の素子を集積し製造されています。これを実現する微細加工技術はコンピュータで管理され、温度と湿度が一定に保たれた最新のクリーンルームで行われています。総長らは実際にクリーンルーム内を見学することでコンピュータ管理された最先端システムを間近にし、その素晴らしさに感心していました。

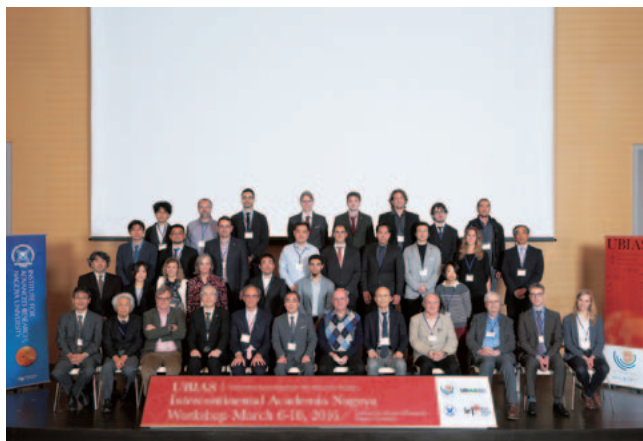
その後、総長自ら東芝四日市工場職員の方々に「NUMIRAI 2020 ～イノベーションに貢献する名古屋大学を目指して～」と題した講演を行いました。会場は東芝四日市工場の幹部と名大OBで満席であったためサテライト会場も用意され、参加者全員が熱心に聴講しました。

最後に、総長と松下智治東芝四日市工場長が協定書にサインをした後、記念撮影を行い、今後の両者の連携を約束しました。

UBIAS ICA 名古屋ワークショップを開催

第1回UBIAS インターコンチネンタル・アカデミア(ICA)名古屋ワークショップが3月7日(月)から18日(金)の間、本学において開催されました。

ICAは、次世代を担う若手研究者の、分野を越えた学術交流を促進するための事業として、2015年からUBIAS(大学附置高等研究院国際連盟)により開催されています。



集合写真

第1回UBIAS ICAは、昨年4月にサンパウロ大学で開催されたサンパウロワークショップ(第1部)と、今回本学で開催された名古屋ワークショップ(第2部)から成ります。「時間」をテーマに、世界各国の高等研究院からの推薦により厳選された若手研究者が、シニア研究者によるレクチャー等に参加しながら議論をし、学際的な共同研究の可能性について探りました。

本ワークショップでは、ノーベル賞受賞者である益川敏英特別教授、野依良治特別教授による特別講演や、生物、物理、人文社会、芸術の各分野の世界最先端の研究者による「時間」に関するレクチャーが行われました。参加者は「時間」について分野を超えて深く議論し、その成果の一つとして、「時間」をテーマとするMOOC(大規模オープン・オンライン・コース)の脚本の作成が進められました。今後、2017年完成を目指してMOOCの作成が進められる予定です。本ワークショップの詳細は、以下のURLからご覧いただけます。

<http://intercontinental-academia.ubias.net/nagoya>

第1回全国リーディングプログラム合同女子会を開催

「第1回全国リーディングプログラム合同女子会」が、3月26日(土)から27日(日)の2日間、静岡県内のホテルにおいて開催されました。本会は、博士号の取得を目指すリーディングプログラムに所属する女子大学院生が、大学の枠を超えて一堂に会し、キャリアを形成していくうえでの悩みや不安を共有することが第一の目的に掲げられ、本



集合写真

学の博士課程教育リーディングプログラムに参加する学生が有志で集まった「リーディングプログラム合同女子会実行委員会」が主催しました。

はじめに、本会実行委員代表である PhD プロフェッショナル登龍門に所属する押野玲奈さんからあいさつがあり、続いて、富永由加里株式会社日立ソリューションズ常務執行役員から女性がリーダーになることについての講演が行われました。その後、博士号を取得し産学官各界において活躍している女性プロフェッショナルと共に、参加学生が10班に分かれ、自分たちの悩みや理想を実現する際に課題となること、そしてその解決策について議論しました。

2日目には議論した成果物をポスターにまとめて、発表・質疑応答を行いました。両日ともに女性プロフェッショナル、学生間で活発な議論が交わされ、閉会式における全体討論でも、次回も開催してほしいといった声が上がりました。本会には、女性プロフェッショナル17名、学生57名、文部科学省や日本学術振興会からの見学者6名の計80名が参加し、普段は時間がなくて悩んでいられないような問題を共有でき、実際に博士号を取得し社会で活躍している人生の先輩とも交流を深めるまたとない機会となりました。

ワークショップ「大学の研究力・研究マネジメント強化に向けて」を開催

本学のリサーチ・アドミニストレーター (URA) による施策提案ワークショップ「大学の研究力・研究マネジメント強化に向けて」が、3月24日(木)、ナショナルイノベーションコンプレックス (NIC) において開催され、100名を超す役員、教職員が参加しました。

本学の URA は、その制度やミッション等について見直



URA からの施策提案に傾聴する参加者

しが進められ、教員、事務職員等と並ぶいわゆる「第3の職種」という位置づけが今般明確に打ち出されました。そうした背景のもと開催された本ワークショップは、大学の研究力強化と研究マネジメントの向上に資する新たな施策を URA 発で提案するという形で進められました。本ワークショップには、川上伸昭科学技術・学術政策研究所長、山下 洋文部科学省産業連携・地域支援課大学技術移転推進室長が来賓として参加しました。川上所長による「URA が大学の知的資産マネジメントを変えていく」と題する特別講演では、大学における研究資産マネジメントにおいて、URA の果たす役割の大きさや期待が紹介されました。

主題である URA による施策提案では、大学の研究力・研究マネジメント強化に資する新たな施策として、今年度より実施に移すことを前提に5つの取組みが提案されました。いずれも高い評価を受けるとともに、コメンテーターからの指摘、助言によって、提案内容のさらなる充実化が図られました。これら URA による提案により、本学が世界屈指の研究大学として、また、産学官連携を含む多様な連携によるイノベーションに貢献する大学として、今後益々成長、発展していくよう大いに期待されるところです。

平成28年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決まる

平成28年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決定され、本学から、科学技術賞で1件、若手科学者賞で4件が選出されました。

この表彰は、科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた者について、その功績を讃えることにより、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、我が国の科学技術水準の向上に寄与することを目的として受賞者は以下の通りです。

科学技術賞

「ナノバイオデバイス創製とゲノム医療応用に関する研究」
馬場嘉信 大学院工学研究科教授

若手科学者賞

「生物リズムを安定化する分子基盤の研究」
北山陽子 大学院理学研究科講師

「細胞分裂の対称性維持の仕組みとその意義に関する研究」
清光智美 大学院理学研究科助教

り、「科学技術特別賞」・「科学技術賞（開発部門・研究部門・科学技術振興部門・技術部門・理解増進部門）」・「若手科学者賞」・「創意工夫功労者賞」・「創意工夫育成功労学校賞」の各賞が設置されています。

なお授賞式は、4月20日(水)に文部科学省で執り行われました。

「細胞融合による被子植物の花粉管誘引停止機構の研究」
丸山大輔 横浜市立大学木原生物学研究所助教
(3月まで高等研究院特任助教 ※本学からの推薦)

「病原細菌の抗菌薬耐性機構に関する研究」
和知野純一 大学院医学系研究科講師

第4回水田賞授賞式を挙げる

第4回水田賞授賞式が、3月17日(木)、豊田講堂第5会議室において挙行されました。水田賞は、水田 洋名誉教授からのご寄附の意志に基づき、人文・社会科学（思想史）の分野で将来の発展が期待できる優れた研究能力を有する若手研究者を顕彰し、その研究意欲を高め、研究の発展を支援する目的で創設されました。今年度は、第4回として



記念撮影

人文・社会科学（思想史）の分野で、国内の若手研究者を対象に募集を行い、慎重な審査を行った結果、佐久間俊明 穎明館中学高等学校教諭を顕彰することに決定しました。

授賞式には、松尾総長、水田名誉教授、國枝理事、市橋理事及び審査委員である安藤隆穂 中部大学教授、坂本達哉 慶應義塾大学教授が出席し、安藤教授から受賞者の紹介及び研究テーマについての審査講評がありました。次いで、総長から「今回の受賞を励みに、今後も高い志をもって自らの研究に精進し、我が国の学術研究の発展に貢献していただきたい」とのあいさつがありました。

また、受賞者からは、「大変栄誉ある水田賞に選ばれ非常に光栄であり、今後ますます研究に精進していきたい」との謝辞がありました。

その後、豊田講堂応接室において、受賞者及び授賞式出席者との懇談が行われ、研究の動機や今後の研究の発展性について意見交換がなされました。

リン酸化プロテオミクス解析を用いたドーパミン機能の解明

黒田 啓介
大学院医学系研究科特任助教

た良いことがあると分泌が増え、嫌なことがあると分泌が減ることから、快感を制御していると考えられています。犬に餌を与える前にベルの音を鳴らすことで、次第にベルの音を聞くだけで唾液を分泌するという有名なパブロフの条件付けにおいて、エサと共にドーパミンが分泌されることが条件付けに必要なことが知られています。しかし、なぜドーパミンが条件付けに必要なのかはわかっていませんでした。

私たちは、ドーパミン刺激を行った脳組織のスライス切片を用いてリン酸化プロテオミクス解析を行い、100種類以上のリン酸化基質を新たに同定しました。細胞や動物レベルで様々な解析を行った結果、ドーパミン刺激がRap1シグナルを活性化していることを見出しました。マウスのRap1を人工的に活性化させて条件付け実験を行うと、条件付けがより強化されました。一方、Rap1を欠損させて条件付け実験を行うと、条件付けが起きませんでした。さらにRap1と細胞機能の関係を調べたところ、Rap1が活性化すると神経細胞の興奮性が上昇し細胞がオン状態になる一方、Rap1が欠損すると興奮性が低下し細胞がオフ状態になることがわかりました。このことから、ドーパミンはRap1シグナルを介して、エサと音との条件付けに必要な神経細胞のオン/オフを制御していることがわかりました(図2)。

参考 http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/public-relations/researchinfo/upload_images/20160122_med.pdf

細胞は周囲からの刺激に応答して活動しますが、外部から受け取った情報を細胞内に伝える際、多くの分子がドミノのように順番に活性化することで伝達されます。これを細胞内シグナル伝達といいます。そして普段は作られなかったり、作られても機能していない分子が何らかの異常により活性化することが、病気の原因となります。

細胞内シグナルの中でタンパク質のリン酸化は、細胞の特性を変えたり、病気の発症や促進、抑制にも関わったりする重要な生体内化学反応の1つです(図1)。このリン酸化反応のスイッチにあたるタンパク質(酵素)とそれによってリン酸化が進行するタンパク質(基質)の組合せは、質量分析器などの最新機器を駆使して網羅的に同定することができ、このような解析をリン酸化プロテオミクス解析といいます。私たちは様々な刺激が脳内においてどのような細胞内シグナルを活性化させるかについて研究を行っています。今回はその中でドーパミンの研究について紹介します。

ドーパミンは動いたり止まったりといった運動を適切に制御する際に必要で、この機構が破綻するとスムーズに動いたりぴたっと止まることが出来ないパーキンソン病という病気になります。ま

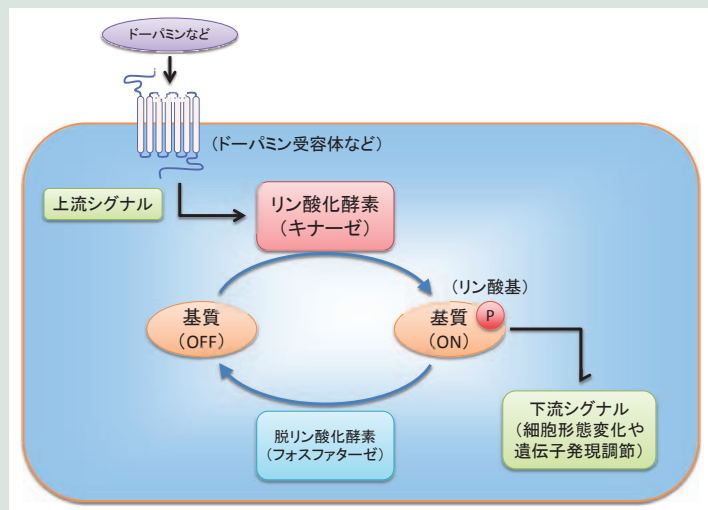


図1 リン酸化と細胞内シグナル
ドーパミンなどの外部刺激はドーパミン受容体を介して細胞内に伝えられる。細胞内では基質のリン酸化がリン酸化酵素(キナーゼ)と脱リン酸化酵素(フォスファターゼ)によって制御され下流へと伝えられる。

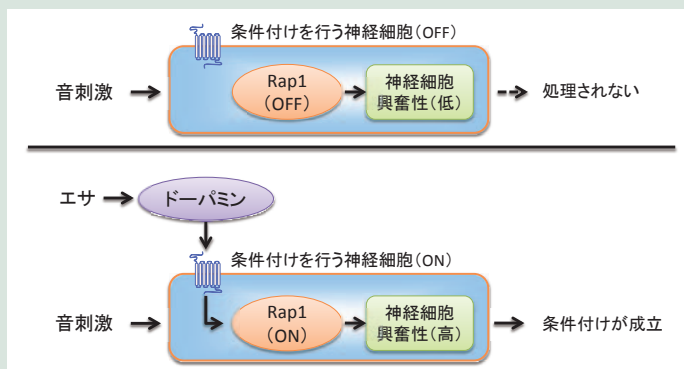


図2 ドーパミンの細胞内シグナルと条件付け
(上) 音刺激は単体では処理されない。(下) エサ情報によってドーパミンが分泌されるとRap1が活性化し、神経細胞の興奮性が高まることで、条件付けを行う神経細胞がオンになり条件付けが成立する。

加齢黄斑変性の新規治療法開発

寺崎 浩子 大学院医学系研究科教授

加齢黄斑変性とは

加齢黄斑変性（AMD）は、先進国における中途失明の原因疾患としてとても重要な疾患です。アメリカではその患者数はがん患者に匹敵すると報告されています。日本では黄斑変性が失明原因の10%、第4位ですが、その割合は増加傾向にあります。AMDは、脈絡膜新生血管（CNV）という異常血管が網膜の下に増殖する滲出型（wet-AMD、図1）と、網膜色素上皮細胞（RPE）の変性を原因とする萎縮型（dry-AMD）に分かれます。CNVが発生する原因として血管内皮増殖因子（VEGF）の発生が考えられ、現在ではVEGFを標的とした分子標的薬の眼内注射が最も一般的な治療法として行われています。特に日本ではwet-AMD患者が多く、そのため抗VEGF薬が多く使用されますが、度重なる注射にもかかわらず再発症例も多く、加えて眼球に直接注射することによる患者さんへの負担を考慮すると、抗VEGF療法は決して万能な治療法ではありません。今後益々高齢化が進むにつれwet-AMDの新規治療法や予防法開発が急務となっています。



図1 加齢黄斑変性患者の眼底写真。黄斑と呼ばれる網膜の中心部分に病変(矢印)があり、そのため著しい視力障害がある。

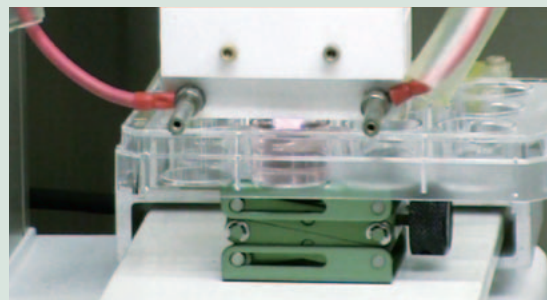


図2 プラズマ賦活液の作成。特殊な装置の下に溶液を設置する。プラズマを一定条件で照射することでプラズマ賦活液が作成される。

プラズマ医療とは

プラズマとは、高速電子との衝突に伴う気体分子の電離や解離により生じる粒子であり、低温プラズマ（気体温度が室温程度であるプラズマ）を応用して癌や皮膚疾患を治療する医療技術としての展開が世界的に期待されています。我々は、未来社会創造機構堀 勝教授らとの医工連携プロジェクトとしてプラズマ技術の眼科領域への応用を検討した結果、低温プラズマを照射したプラズマ賦活液（図2）に生体の異常血管を抑制する効果があることを発見しました。

AMD治療への応用

前述したようにwet-AMDの攻略にはCNVの抑制がカギとなります。我々はマウス眼底にレーザー照射することで実験的CNVを作成し、その眼球にプラズマ賦活液を投与したところ、CNVの体積が有意に減少し（図3）、またプラズマ賦活液によって眼内のVEGFが抑制されることも確認されました。しかもプラズマ賦活液を投与したマウス眼球の網膜障害を評価したところ、網膜

に明らかな網膜障害は確認されず、プラズマ賦活液の安全性が確認されました（図4）。プラズマ賦活液を wet-AMD の新規治療法として利用することができれば、今までの治療法と合わせることでより高い治療効果が期待できます。

今後の展望

プラズマ賦活液による治療効果の期待は wet-AMD に限ったものではありません。実は皆さんが思っているより遥かに多くの眼科疾患が、網膜血管の異常に由来します。網膜血管は他臓器の血管に比べて非常に細いので、生活習慣病などが悪化した際、脳や心臓の血管よりも先に閉塞することがあるのです。その際網膜内に異常な新生血管が発生する病気が複数あり、これらの網膜疾患の治療にもプラズマ賦活液が利用できる可能性は十分あります。

しかし一方で、プラズマ賦活液を作用させた際の網膜の微細な変化や、新生血管がなぜ抑制されるのかという根本的な謎がまだ明らかになっていません。治療適応の疾患を拡大させるのと並行して、プラズマ医療の謎と豊かな可能性をさらに研究していきたいと考えています。

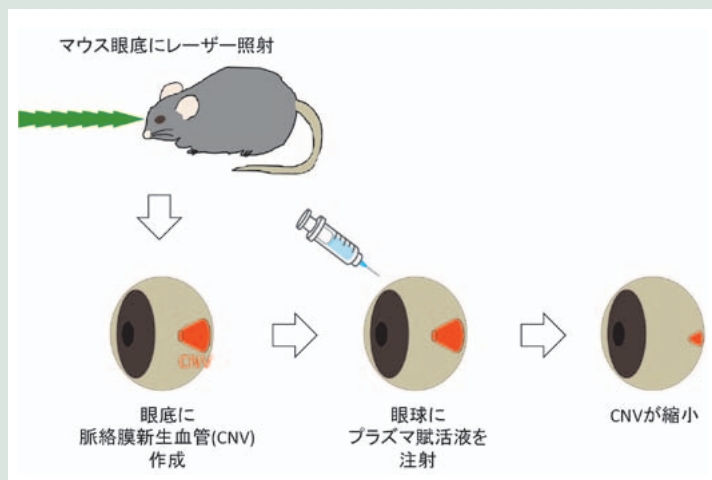


図3 マウス眼底にレーザーを照射すると、その眼底に脈絡膜新生血管（CNV）が発生する。プラズマ賦活液には、このCNVを縮小させる力がある。

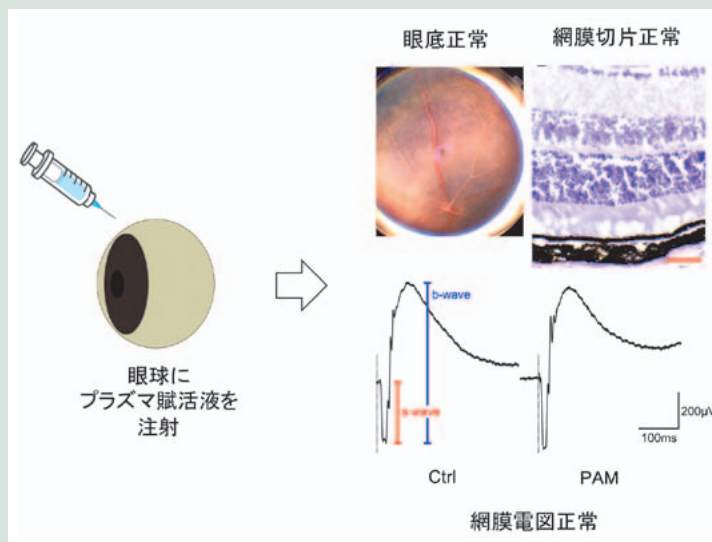


図4 マウス眼球内にプラズマ賦活液を注射した後にマウス眼底を調べても、眼底に網膜変性などの異常が発生していないことが眼底写真・網膜切片・網膜電図で確認された。

1984年 名古屋大学大学院医学研究科満了
 1988年 名古屋大学医学部助手
 1991年 名古屋大学医学部附属病院講師
 1997年 ハーバード大学客員講師
 1998年 名古屋大学医学部眼科学助教授
 1999年 名古屋大学大学院医学研究科感覚器障害制御学教授
 2005年 現職、名古屋大学大学院医学系研究科眼科学教授
 専門分野：網膜硝子体疾患、眼内手術全般
 モットー：チームワークが最も大切・いつも元気に明るく楽しくお仕事

てらさき ひろこ



明日の医療の質向上をリードする医師養成プログラム（ASUISHI） 第1期生が修了

●大学院医学系研究科



修了式後の記念撮影（修了生、講師、PJメンバーで）

大学院医学系研究科は、3月24日（木）、医学部附属病院講堂において、『明日の医療の質向上をリードする医師養成プログラム（ASUISHI）』第1期生の最終授業及び修了式を執り行いました。このプログラムは、文部科学省「課題解決型高度医療人材養成プログラム」に選定されたもので、本学初の履修プログラム制度を利用し、全国の医療機関に勤務する医師を対象に行う教育事業です。医学部附属病院が全国に先駆けて整備強化してきた医療の質・安全管理部、中央感染制御部などの横断的医療基盤部門が中心となり、これまで系統だった教育が行われてこなかったこれらの分野の最先端の知見を、ケースメソッドやスモールグループ討論などを多用したアクティブラーニングとして提供し、明日の医療機関に必要な実践知を習得した管理者医師を養成することを目的としています。このプログラムのもう一つの特徴は、中部の産業界で確立され世界的にも認知されている品質管理手法を、医療の質向上に直接導入するためにトヨタ自動車及び中部品質管理協会と連携したことです。それぞれの病院の課題に対してトヨタの問題解決8ステップを利用して改善に導く手法を、産業界の品質

管理専門家が講師となって半年間かけて実習する問題解決コースが、カリキュラムに取り入れられています。

午前中は、全国の病院に勤務する医師12名が、半年間かけて取り組んできた患者安全上の課題解決に関する発表を行いました。それぞれの病院で発生している問題にリーダーシップを発揮して粘り強く取り組み、自らが設定した目標を実現していく過程が報告され、参加していた所属病院の院長や同僚らも熱心に聞き入っていました。どの報告も、思いつきや従来の方法ではたどり着けなかった真因に現地現物でアプローチし、病院メンバーを率いての改善策を実行する様子が想像できる素晴らしい発表で、参加者の誰もが医療の質管理が本格的に導入されつつあることを感じる内容でした。最後に3名の講師から日常業務を抱えつつ改善活動を継続した努力に対する労いのメッセージが贈られました。

午後に行われた修了式では、事業責任者である高橋医学系研究科長のあいさつのもと、修了証、履修認定証、医療安全管理者証の授与が行われました。次いで、佐々木真一中部品質管理協会長から、お祝いと今後の継続的改善活動に期待する言葉が寄せられました。受講生からはそれぞれASUISHIで学んだことや、今後も病院の改善のために行動したいとの決意が語られました。さらに受講生から、講師陣やプロジェクトメンバーへのお礼の花束贈呈などもサプライズ企画として用意され、社会人の学びにふさわしい修了式となりました。

修了生、そして修了生所属医療機関は今後、ASUISHIプロジェクトの人財ハブセンター事業に登録され、情報共有やベンチマークを継続し、日本全体の医療の質向上をリードするチームとして切磋琢磨し続けていきます。



修了証授与の様子

公開シンポジウム「人文学がつなぐ社会」を開催

●大学院文学研究科

大学院文学研究科は、3月19日(土)、文学研究科講義室において、公開シンポジウム「人文学がつなぐ社会」を開催しました。本年度の公開シンポジウムは、初めて大阪大学大学院文学研究科が共催に加わったほか、人文学にとどまらず自然科学、さらには自治体や民間企業からの幅広い参加者を得て、今回のテーマの謳い文句どおり、大学間、



シンポジウムの様子

異分野間、異業種間をまさに「つなぐ」内容となりました。

まず、佐久間文学研究科長によるあいさつの後、本シンポジウムを企画した佐々木重洋文学研究科教授による趣旨説明がありました。講演では、福永伸哉大阪大学大学院文学研究科教授による「考古学、時空をこえたネットワークをめぐして」、農学国際教育協力研究センター教授であった浅沼修一名誉教授による「現場における真の問題解決のために－自然科学と人文学の連携－」、佐々木教授による「社会問題、環境問題への挑戦－コーディネーターあるいはエディターとして－」と題した話題提供及び問題提起がなされました。その後、それらの内容を受けつつ、「人文学に期待する社会的役割」について、澤田法明愛知県振興部地域政策課山村振興室長及び出口幸宏株式会社 CBC クリエイションシニア・マネージャーによるコメント、そしてフロアを交えた総合討論と進みました。世界情勢が大きく変わりつつあるなかで、人文学が果たし得る社会的役割をめぐって、それぞれ熱のこもったプレゼンテーションと議論が展開され、シンポジウムは盛況のうちに幕を閉じました。

岡崎恒子名誉教授文化功労者顕彰を祝す会を開催

●大学院理学研究科、男女共同参画室

岡崎恒子名誉教授の文化功労者顕彰を祝す会が、3月23日(水)、理学南館坂田・平田ホールにおいて開催されました。はじめに松尾総長からお祝いの言葉があり、次いで、総長から岡崎名誉教授に特別教授の証書が授与されました。次に、松本理学研究科長による業績紹介の後、岡崎名誉教授による「岡崎フラグメントと不連続複製機構－仮説

が実証されるまで－」と題した特別講演が行われました。夫であり共同研究者でもあった岡崎令治先生(元理学部教授)とどのような実験結果やロジックから「不連続複製機構」を提唱されたか、また恩師であるスタンフォード大学のアーサー・コーンバーグ教授(1959年ノーベル医学生理学賞)から岡崎令治先生が急逝された直後に励ましの手紙が届いた話など、聞く人に深い感銘を与えました。

講演会の後は、パネル討論会が開催されました。佐々木成江理学研究科准教授が進行役を務め、パネリストには、坂東眞理子昭和女子大学学長、吉村美栄子山形県知事、小谷元子東北大学原子分子材料科学高等研究機構長及び東村博子男女共同参画室長、森 郁恵理学研究科教授が参加して「女性リーダーに求められるもの」などについて、それぞれが忌憚のない、個性あふれる意見を述べられて、非常に興味深い討論会となりました。

最後に開催された祝賀会は、國枝理事のあいさつに続き、太田朋子国立遺伝学研究所名誉教授、向畑恭男名誉教授による祝辞のあと、黒澤良和藤田保健衛生大学教授の乾杯の発声により始まりました。大勢の参加者が岡崎名誉教授を囲み、和やかで温かい祝賀会となりました。



総長より特別教授称号の授与

ICCAE 第4回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、3月22日（火）、農学部第7講義室において、2015年度第4回オープンセミナーを開催しました。今回は、ユリウス B. パソロン インドネシア・ハルオレオ大学国際交流所長と ICCAE 客員准教授のイスラット J. シェリー バングラデシュ農業大学准教授による講演が行われました。



シェリー准教授による講演の様子

パソロン所長は、「インドネシア南東スラウェシにおける陸稲品種の多様性と農業形質」について講演し、南東スラウェシ州のトラキー族は雨季に様々なタイプの陸稲品種を自家消費用として栽培していること、それら陸稲品種の収量は概して低いものの、香りなど住民の嗜好性により伝統的な栽培が続けられていることを紹介しました。また、陸稲の生育や収量は地形によっても大きく異なることについて、調査事例を示して解説しました。

一方、シェリー准教授は、「バングラデシュにおける稲作の現状・課題と将来展望」と題した講演の中で、乾燥や塩害、洪水、高温や低温障害、サイクロンによる被害等により、バングラデシュのイネの反収は未だ低い水準に留まっている現状を報告し、この状況を打破するために“Climate Resilient Cropping Pattern”などの栽培技術に関する新たな取り組みが試みられていることを紹介しました。これらの講演を受けて、低生産地域における稲作技術の改善に向けた活発な議論が展開されました。

第32回企画展「ボタニカルアート作品展 同時開催 伊藤篤太郎誕生150年」を開催

●博物館

博物館では、2月4日（木）から4月5日（火）の間、第32回博物館企画展「ボタニカルアート作品展 同時開催 伊藤篤太郎誕生150年－初めて植物に学名をつけた日本人－」を開催しました。ボタニカルアート作品展は、博物館友の会ボタニカルアートサークルの作品を中心とした展示です。ボタニカルアートはもともと植物学と共に発達した科



ギャラリートークの様子

学的な細密画で、写真の発達した現在でも図鑑などに使われていますが、現在はアートとしても人気が高く、多くの来館者が訪れました。さらに今年は、名古屋生まれの植物学者であり伊藤圭介を祖父に持つ伊藤篤太郎に同館が初めてスポットを当て、トガクシソウ事件の経緯、タイプ標本となったナメコの原画、篤太郎の著書「大日本植物圖彙（ずい）」の素晴らしい植物画（リトグラフ）などを展示しました。また、Kew 王立植物園に保存されていた篤太郎の書簡、篤太郎が新種だと思っていたキノコ（ハエトリシメジ）が、数十年後に偶然にも同じ名前をつけて他の学者が新種記載をしていたことなどの新発見、新事実もありました。期間中には篤太郎の孫である伊藤 昭氏をはじめ、国立科学博物館から北山太樹氏、秋山 忍氏、神奈川県立生命の星・地球博物館から大坪 奏氏、折原貴道氏、長野市立博物館分館戸隠地質化石博物館から中村千賀氏、篤太郎の研究者でもあり篤太郎は大叔父にあたる岩津都希雄氏の特別講演も開催し、盛況でした。来館者4,361名のほとんどが、篤太郎の名を初めて耳にする方ばかりでしたが、篤太郎の業績に触れて、驚いたり、感心したり、十分楽しんでいたようです。

ミクロの探検隊®を開催

●博物館

博物館は4月9日(土)、大学院医学系研究科附属医学教育研究支援センター分析機器部門及び株式会社日立テクノロジーの協力により、「ミクロの探検隊®-ホニュウ類の組織を電子顕微鏡でみよう」を開催しました。

「ミクロの探検隊®」は、博物館が2007年から行っている電子顕微鏡を使用した体験型次世代教育で、今回は、抽



生物顕微鏡を使用する参加者

選により選ばれた23名の小学5、6年生と中学生、高校生が参加しました。まず、タマネギの細胞を使って生物顕微鏡の使い方を学習し、次に、あらかじめ用意されたラットの主な臓器組織の標本を生物顕微鏡で観察し、各組織の構造や働きの説明を受けました。さらに、走査型電子顕微鏡を使用して、小腸、腎臓、気管、舌を観察し、撮影しました。同じラットでも、臓器によって組織や細胞の構造も全く違い、それぞれの働きによって構造がより機能的に変化(分化)していることを学びました。また、自らの手で電子顕微鏡を操作して撮影した写真をポストカードとして印刷し、記念品としました。アンケートにも「次回もまた参加したい」、「他の臓器も電子顕微鏡で観察したい」などの声が寄せられました。

2008ノーベル賞展示室 来館者5万人突破の記念式典を挙

●素粒子宇宙起源研究機構

素粒子宇宙起源研究機構(KMI)は、3月29日(火)、ES総合館2階2008ノーベル賞展示室において、来館者5万人突破の記念式典を挙りました。

本展示室は、本学卒業生の益川敏英特別教授と小林 誠特別教授の2008年ノーベル物理学賞、本学元助教授の下村 脩特別教授の2008年ノーベル化学賞受賞を記念し、

3人の博士が学んだ本学理学部を広く市民に紹介し、特に若い次世代の学生に、幅広い分野において可能性を秘めている理学を志すきっかけとしてもらうことを目的に運営されています。2011年6月、本学博物館のサテライト施設としてES総合館2階にリニューアルオープンし、約4年8カ月後の本年2月に、累計来館者数が5万人を超えました。

式典には、5万人目の来館者となった川上 浩プロメテック・ソフトウェア株式会社西日本支社長を招き、同展示室運営委員会委員である國枝理事、松本理学研究科長、足立 守名誉教授、棚橋誠治理学研究科教授が参加しました。

國枝理事による開会のあいさつの後、松本研究科長から記念の賞状と、益川特別教授の色紙及びサイン入り書籍が川上氏に贈呈され、川上氏からは、ギリシャ語で「叡智に対する愛」と書かれた益川特別教授のサイン色紙について、「益川先生から送られたお言葉として大切にしたい」との謝辞がありました。式典終了後には、川上氏を囲んでの歓談が行われました。



記念撮影(左から棚橋教授、松本研究科長、川上氏、國枝理事、足立名誉教授)



情報基盤センターの名誉教授として

石井 克哉 情報連携統括本部

私が名古屋大学に赴任したのは1995年1月17日阪神・淡路大震災の発生した当日でした。その後、2年間を応用物理専攻、5年間を計算理工学専攻と工学研究科でお世話になり、2002年から情報連携基盤センター、2007年から情報基盤センターの大規模計算支援環境部門教授として14年間全国共同利用の名古屋大学スーパーコンピュータを中心として計算科学、計算機科学の研究が発展するよう努めてきました。この間、この活動を支えてくださったセンター長、センター教員・職員の皆様、名古屋大学の多くの研究者の方々に感謝いたします。

特に、多くの異なる分野の研究者と直接話し合うことだけでなく、さまざまな現象の計算結果の可視化を身近で見ることができたことで、私自身の研究分野である計算流体力学の

研究についても、計算結果に対するいろいろな見方を学ぶことができ充実した成果が得られたと思っています。さらに、他の全国共同利用計算機をもつ7大学と連携した産業利用のための共用イノベーション事業、「京」を頂点としたハイパフォーマンス・コンピューティング・インフラ事業への関わりの中で、全国の研究者等と知り合えたこともよい思い出です。

現在、名古屋大学には世界で22位の高速なスーパーコンピュータが入っています。これを使って名古屋大学の計算科学の研究がいつそう発展することを願っております。



もう一方先へ もう少し深く

千葉 恵美子 大学院法学研究科

この度は、退職にあたり「名古屋大学名誉教授」の称号をいただきまして大変感謝しております。世紀の変わり目に名古屋大学に赴任し16年半にわたって教員生活を送ったことは、私にとって大きな転機となりました。大学が社会にどのように貢献できるかを真正面から問われることになったためです。

教育面では、社会に必要とされる人材の育成を考える機会を与えていただきました。今は当たり前となったインターンシップですが、2000年に法学部の教育課程に組み込むために、多くの実務家の方と交流する機会を与えていただきました。また、2004年に開設された法科大学院では、新しい教育内容の開発に実務家とともに従事し、多くの人材を法曹界へ送り出すことができました。

また、研究面では、学際的な出会いを通じて、イノベーションの発達に伴ってどのような法制度設計が必要かを研究することができました。特に、消費者法分野における大型研究プロジェクトを推進できたことは、今後の研究に大きな財産となりました。

今は縁あって、大阪大学の法科大学院で、引き続き、実務法曹の養成に携わるとともに、「もう一方先へ もう少し深く」をモットーに、金融とITが融合するFintec分野の法制度設計に向けて大型研究プロジェクトを率いて、研究に邁進しています。



教養部に始まり教養教育院に終わる

荒山 裕行 大学院経済学研究科

私の大学生活を振り返ってみますと、最初は学問の基礎を学ぶ教養部の人文・社会と自然科学の勉強に始まりました。勉強をあまりしなかったということで、教養不足の自覚があったのを明確に覚えております。そのような経緯で、名古屋大学で教えるようになってからも、「教養部」という響きの故に敷居が高く感じられ、将来有る若者に悪い影響を与えては申し訳ないと思い、「基礎セミナー」のような各自の勉強の方向性に影響を与えるような講義は担当せずに過ぎて参りました。

ところがひょんなことから平成27年度に教養教育院の副院長を引き受けることになりました。教養教育院と意図して関わってこなかったことで心理的に苦手意識があり、積極的な役割を果たさず時が過ぎました。敢えてやったことをあげ

ば、教養教育院の組織改編にあたり、組織や委員会の名称が少しばかり解りやすいものになるよう意見を述べたこと、平成23年度に導入された成績評価制度でやや曖昧であった「履修の取り下げ制度」の説明内容を、担当する先生方・履修する学生諸君の双方にとって解りやすいものとなるよう「ない知恵」を絞ったことぐらいでした。

「釣りは鮎から始まり、鮎に終わる」と言われます。結局のところ、私の大学人生も「教養部に始まり教養教育院に終わる」こととなりました。しかしながら、それはそれで良かったと思う今日この頃です。



格致日新

濱口 道成 大学院医学系研究科

私儀、昨年9月をもって名古屋大学を退職し、10月より本拠地を東京に置きつつ、科学技術振興機構理事長として働いています。総長在任時は、皆様の協力により様々な困難を越える事ができ、「アジアのハブ」を目指し、名古屋大学の研究並びに国際展開を国内屈指のものとする事ができました。改めて、皆様のご支援・ご協力に感謝いたします。COI、WPI、リーディング大学院（国内二位）の獲得、スーパーグローバル大学の高い評価、研究者一人あたりの科研費取得一位となったこと、日本初の現地法人資格を持ったアジアサテライトキャンパスの展開など、無我夢中で取り組んだ一つ一つの事が思い起こされます。総長就任決定後、益川先生、小林先生、下村先生がノーベル賞を受賞され、最終年度には赤崎先生、天野先生が受賞されました。つくづく、私は

協力者、理解者に恵まれ、時の運に助けられ、幸福な時を送ることが出来たと実感しております。昨年4月より、本来の研究生活に戻り、開放感と充実感を味わっておりましたが、文部科学行政に深く関わってきた経緯から、科学技術振興機構理事長に着任しました。今、日本の科学技術、研究を巡る環境、若者の未来は、決して楽観を許さない状況にあります。与えられた仕事・巡り合わせに、忠実に向かい合い、今しばらくの社会貢献を続けていきたいと願っています。



「そういう時代だから」という納得について

鈴木 國文 大学院医学系研究科

名古屋大学には、学生時代の6年、医師修業時代の2年、教員になって19年半、計27年と半年お世話になった。これだけ長かった大学を去るとなると、思うことは実に多い。国立大学が独立法人化してすでに12年、この間に、大学は大きく変わったと思う。ひとつだけ変化の例を挙げるなら、教員が、研究の枠組みづくりと自身のしたことの確認作業にかなりの時間を割くよう強いられるようになった。そのことの是非は措いておこう。不思議なのは、その理由について、ほとんどの人が「そういう時代だから」と自らを納得させていることである。「そういう時代」と言いながら、どういう時代だからそうになっているのか、あるいは誰がどうしようとしているからそうになっているのか、その点については、答えがない。ただ単に「そういう時代」なのである。「そういう時代だか

らそうしなければならない」というトートロジーで事が進み、結果どこに行くのか、先行きについては何も見えない。どこから来てどこに行くのかが見えないのだ。このことが、私の専門とする精神病理学の領域では、「ひきこもり」のような社会からの離反、抑うつや不安の漠とした広がり、動機なき犯罪など、様々な心的帰結をもたらしているように思う。この不思議について、いま一度考えてみよう、大学を離れ、再び臨床の場に出てみることにした。しかし、離れるとなると、大学というところ、つくづく自由なところだと思う。



名大45年をふりかえって

伊藤 義人 大学院工学研究科

学生6年間、教員39年間（助手10.5年、助教授7.5年、教授21年）の合計45年を名大でお世話になりました。教員生活の後半16年間は、附属図書館長9年、情報戦略室長／情報連携統括本部副本部長7年（内4年間は情報基盤センター長も）として活動しました。

附属図書館では、全国の国立大学の電子ジャーナルの立ち上げ、Repository、Learning Commonsなど新しい仕事に取り組みました。情報関係では、初めて情報環境マスタープランや情報セキュリティポリシーを策定し、現時点で国内の大学で最大で、世界52位の計算能力を持ったスパコンの導入、情報セキュリティ環境などの学内情報基盤環境整備に取り組みました。

また、平成14年に全学同窓会を立ち上げ、2年ごとの選挙

でしたが、これまでに合計14年間に渡って代表幹事もしています。全く新規の組織を立ち上げ、大学支援のため全学同窓会の財政基盤や活動基盤を整備してきました。

教職員の方々の多大なご協力によりある程度出来たこと、まだまだこれからの課題など種々の思いがありますが、後任の方々全てを託したいと思えます。

定年まで2年を残し、ソフトランディングをするつもりでしたが、ゴーアラウンドとなり、別組織で新規の仕事でもう少しがんばることになりました。名大を去ることに寂しい思いもありますが、45年間のお礼を申し上げます。



すばらしい先輩、同僚、学生諸君に感謝

早川 義一 大学院工学研究科

1979年4月、工学部附属自動制御研究施設の助手に採用され、学科の新設、大学院重点化などの組織改革の流れの中で、情報工学教室、電子機械工学教室と所属が変わりましたが、一貫して「システム制御の研究と教育」に携わることができ、しかも、この間、すばらしい先輩、同僚、学生諸君に支えていただいたことを心から感謝しております。

学生諸君には、学業に励み、専門的な知識や技術者としての素養を育ててもらうことに加え、大学生生活では大いにはじめ、ぶつかり、その中で、将来を見据えた、将来に耐えられる価値観、世界観を培ってほしいという気持ちで接してきたつもりです。その思いを学生諸君にどれだけ伝えることができてきたか、甚だ自信がありません。

研究面では、制御システムの構造論やロバストデジタル制

御に関する理論研究や自動車のエンジン制御、柔軟構造物の制振制御、ロボット制御などの応用研究で、研究室の皆さんと悪戦苦闘しながら、それなりの成果が得られたことは大変良い思い出となっております。

社会の期待と要請に応えるべく、大学が自ら大学改革に取り組むことは当然であります。高等教育を担う大学の教育と研究には、国や時代を超えて、大事にしなければならない普遍的なものがあるようにも思います。工学研究科、名古屋大学の益々の発展を心より祈念しております。



受くるより与うるは幸いなり

鈴木 繁夫 大学院国際言語文化研究科

数多くの学生・院生からは、教育への絶えざる工夫と濃密な授業内容へと駆り立てられ、実務にあたっては職員の皆様から援助と知恵をさずかり、同僚の先生方からは研究へのエネルギーをいただきました。在職を開始した名大平和憲章制定の翌年から、院重点化・独法化を経て、文系再編始動の現在に至るまで、たえずこのように感じております。この間、大学教員として継続的に活動できたのも、運がよかったからではなく、自己変革しつづける組織体の一員であったからこそでした。

この与えられた深い恵みに加え、名誉教授の称号までいただくのですから、人生の次なる望ましいステップは、自己変革の「二毛作」（異職種・他専門への移行）、あるいは、恵みを「受くる」から「与うる」の「転換作」（社会貢献）だと

考えましたが、いかんせん、油の切れそうな頭と鈍くなっていく体です。しかも育て上っていない作物がPC畑に眠っています。やはり私に分相応なのは、「与うる」という志を強く持って、教育・社会・研究という「三圃」で残された時間を送り、ご縁のある方々にお返しをして、「幸い」でありうることだと思い至っております。したがってこれからは、「与うるは幸い」が最期につづやけるかが、私にとっての試金石です。

長い間、本当にお世話になりました。心から皆様にお礼を申し上げます。



第二の母校

前多 敬一郎 農学国際教育協力研究センター

大学院博士課程を修了し、名古屋という見知らぬ土地へ赴任したのが昭和60年である。言い古された表現かもしれないが、私にとって今や名古屋大学は第二の母校になった。現在母校で教鞭を執っていても、その学生たちに告げることのすべてが、名古屋大学での経験に基づいている。学位を取ったばかりの未熟であった私にさまざまな考えを教え、励まし、叱咤し、育ててくれた名古屋大学は人生にとって何物にも代えがたい存在だ。このたび、名誉教授の称号をいただくことは、こんな私にとって何よりもうれしく、そして誇らしい。私を受入れ、育ててくれた名古屋大学に心からお礼を申し上げたい。

名古屋大学での27年3カ月間に私がもっとも誇りに思うのは研究室を育てていった人たちである。自分の研究業績を思

うとき、その論文の一つ一つとともに研究をした学生の顔が浮かぶ。以前、定年退職する研究者が、「所詮論文など紙くずだ」といっていたのを思い出す。プリント版がなくなった今雑誌では紙くずですらない。しかし、私にとっては論文は紙くずでもデジタルファイルでもない。学生とともに研究人生を生きてきた証である。研究者として選んだ大学教員であったが、名古屋大学での勤務の中で、大学教員が教育者であることを学んだ。

名大を表敬訪問された方々 [平成28年1月16日～4月15日]

| 日付 | 国/地域 | 訪問者 | 目的 |
|---------------|---------|--|---|
| 1月18日 ～20日 | スウェーデン | ルンド大学医学部からグニラ・ウェスタグレン・トソン学部長 他6名 | 調印式及び合同学術協力会議 |
| 1月19日 | カナダ | 駐日カナダ大使館からマッケンジー・クラグストン大使 | 表敬あいさつ及び学内施設見学 |
| 1月20日 | モンゴル | モンゴル国立教育大学からダシュドル・マンダホ教員養成学部長 他2名 | 表敬あいさつ及び国際会議 |
| 1月27日 | 英国 | ブリティッシュ・カウンシルからマット・バーニー駐日代表 | 表敬あいさつ及び博士課程教育リーディング プログラム「PhD プロフェッショナル登龍門」 グローバル・ビジネス講座講演 |
| 3月2日 | ベルギー | ルーヴェン・カトリック大学からダニー・ピータース副学長 | 表敬あいさつ及び意見交換 |
| 3月2日 | 英国 | ケンブリッジ大学障害学生支援センターからジョン・ハーディング センター長他1名 | 表敬あいさつ及び 本学・筑波大学共同企画シンポジウム講演 |
| 3月7日 | 中国 | 華東師範大学から任友群副学長他5名 | 表敬あいさつ及び 教育発達科学とのシンポジウム |
| 3月22日 | 韓国 | ソウル国立大学校からキム・ビョンムン校務処長他6名 | 意見交換及び学内施設見学 |
| 3月23日 ～24日 | ウズベキスタン | ウズベキスタン共和国大統領直属国家行政アカデミーから アフメドフ・ホジアクバルホン副学長他1名 | 調印式及び意見交換等 |
| 4月13日 | フランス | 駐日フランス大使館からティエリー・ダナ大使 | 表敬あいさつ及び日仏討論会 |

新たに締結した学術交流協定 [平成28年1月16日～4月15日]

大学間学術交流協定

| 締結日 | 国/地域 | 大学/研究機関名 |
|-------|---------|-------------------------------------|
| 12月2日 | フィリピン | フィリピン大学機構 ※ |
| 1月5日 | アイスランド | アイスランド大学 ※ |
| 1月11日 | ロシア | ヨッフエ研究所 ※ |
| 2月1日 | ロシア | ロシア科学アカデミーシベリアブランチ, ルジャーノフ半導体研究所 |
| 3月23日 | ウズベキスタン | ウズベキスタン共和国大統領直属国家行政アカデミー |

※名大トピックス No. 273 (2月号) からの追加

部局間学術交流協定

| 締結日 | 国/地域 | 大学/研究機関名 | 部局名 |
|-------|--------|-------------------|-------------------|
| 1月19日 | スウェーデン | ルンド大学医学部 | 医学部 |
| 2月18日 | 中国 | 天津大学建築学院 | 環境学研究科 |
| 2月20日 | モンゴル | モンゴル国立大学国際関係・行政学部 | 環境学研究科・減災連携研究センター |
| 2月24日 | インドネシア | スリウィジャヤ大学農学部 | 農学国際教育協力研究センター |
| 3月10日 | 中国 | 西安外国語大学日本文化経済学院 | 国際言語文化研究科 |
| 3月22日 | インドネシア | ハルオレオ大学 | 農学国際教育協力研究センター |
| 3月24日 | 香港 | 香港中文大学医学部 | 医学部・医学系研究科 |

構成員を対象とした研修 [平成28年1月16日～4月15日]

| 実施日 | 研修名 | 目的 | 参加人数 |
|--------------------|----------------|---|--------|
| 1月22日(金) | 第2回就職担当者連絡会 | 全学の就職担当者のネットワークを形成し、各部局間の連絡調整を図り、本学における学生の就職活動及び就職支援を充実・強化する | 39名 |
| 4月3日(日) ～12日(火) | ハラスメント防止研修 | 構成員のハラスメントに対する認識を深め、防止意識を高める | 4,395名 |
| 4月4日(月) ～13日(水) | 平成28年度新規採用職員研修 | 本学新規採用職員に対し、法人職員としての心構えを身につけると共に、社会人として必要な業務遂行上の基礎知識及び能力を養成する | 40名 |
| 4月12日(火) | 平成28年度動物実験講習会 | 新任教員及び新規に動物実験を開始する大学院生と学部4年生を対象として、生命農学研究科における動物実験のルールと注意点を講習することにより、動物実験の事故防止を図る | 51名 |

新任役員を紹介

●監事

熊田 一充
(くまだ かずみつ)



〈略歴〉
昭和50年10月 トヨタ自動車工業株式会社入社
昭和62年2月 トヨタ自動車株式会社欧州事務所課長
平成5年1月 同法規部次長
平成11年1月 同調達企画部主査(部長)
平成15年1月 同監査役室長
平成17年6月 トヨタファイナンス株式会社常勤監査役
平成19年6月 同常務取締役
平成23年7月 名古屋大学監事

●監事

中谷 聡子
(なかたに さとこ)



〈略歴〉
平成4年11月 監査法人伊東会計事務所入所
平成13年1月 中央青山監査法人
平成18年8月 あらた監査法人(現PwCあらた監査法人)
平成28年4月 名古屋大学監事

新任部局長等の紹介

●情報基盤センター長

森 健策
(もり けんさく)



専門分野：情報工学
〈略歴〉
平成8年10月 日本学術振興会特別研究員(PD)
平成9年4月 名古屋大学大学院工学研究科助手
平成12年4月 名古屋大学大学院工学研究科講師
平成13年4月 名古屋大学難処理人工物研究センター助教授
平成13年8月 米国スタンフォード大学医学部脳神経外科客員助教授
平成15年4月 名古屋大学大学院情報科学研究科助教授
平成19年4月 名古屋大学大学院情報科学研究科准教授
平成21年10月 名古屋大学情報連携統括本部情報戦略室教授
平成28年4月 名古屋大学情報基盤センター長

●教育学部附属中学校・高等学校長

松田 武雄
(まつだ たけお)



専門分野：社会・生涯教育学領域
〈略歴〉
昭和59年10月 琉球大学教育学部助手
昭和63年1月 琉球大学教育学部講師
平成元年10月 埼玉大学教育学部助教授
平成8年10月 九州大学教育学部助教授
平成10年4月 九州大学大学院人間環境学研究院助教授
平成12年4月 九州大学大学院人間環境学研究院助教授
平成17年4月 九州大学大学院人間環境学研究院教授
平成20年10月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授
平成24年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成25年4月 名古屋大学大学院教育発達科学研究科長
平成28年4月 名古屋大学教育学部附属中学校・高等学校長

●大学院法学研究科長・法学部長

石井 三記
(いしい みつき)



専門分野：西洋法制史
〈略歴〉
昭和60年4月 和歌山県立医科大学講師
平成3年4月 和歌山県立医科大学助教授
平成5年4月 東海大学法学部助教授
平成10年4月 東海大学法学部教授
平成11年4月 名古屋大学大学院法学研究科教授
平成17年4月 名古屋大学大学院法学研究科副研究科長
平成17年4月 名古屋大学大学院法学研究科総合法専攻長
平成28年4月 名古屋大学大学院法学研究科長・法学部長

●大学院経済学研究科長・経済学部長

野口 晃弘
(のぐち あきひろ)



専門分野：財務会計
〈略歴〉
昭和63年4月 名古屋商科大学助手
平成元年4月 名古屋商科大学講師
平成5年4月 名古屋商科大学助教授
平成6年4月 名古屋大学経済学部助教授
平成12年4月 名古屋大学大学院経済学研究科助教授
平成17年2月 名古屋大学大学院経済学研究科教授
平成20年4月 名古屋大学大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センター長
平成24年4月 名古屋大学大学院経済学研究科副研究科長
平成26年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成28年4月 名古屋大学大学院経済学研究科長・経済学部長

新任部局長等の紹介

●大学院多元数理科学研究科長

納谷 信
(なやたに しん)



専門分野：微分幾何学
(略歴)

平成2年4月 日本学術振興会特別研究員
平成3年4月 東北大学理学部助手
平成6年10月 東北大学理学部助教授
平成7年4月 東北大学大学院理学研究科助教授
平成10年10月 名古屋大学大学院多元数理科学研究科助教授
平成17年4月 名古屋大学大学院多元数理科学研究科教授
平成19年4月 名古屋大学大学院多元数理科学研究科副研究科長
平成25年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成27年4月 名古屋大学総長補佐(入試担当)
平成28年4月 名古屋大学大学院多元数理科学研究科長

●環境医学研究所長

山中 宏二
(やまなか こうじ)



専門分野：神経内科学、神経科学
(略歴)

平成4年6月 京都大学医学部附属病院医員(研修医)
平成5年4月 福井赤十字病院医師
平成7年4月 国立精神・神経医療研究センターレジデント
平成13年6月 ルドウィックがん研究所博士研究員
カリフォルニア大学サンディエゴ校博士研究員
平成18年9月 理化学研究所脳科学総合研究センターユニットリーダー
平成21年5月 理化学研究所脳科学総合研究センターチームリーダー
平成25年4月 名古屋大学環境医学研究所教授
平成26年4月 名古屋大学環境医学研究所副所長
平成28年4月 名古屋大学環境医学研究所長

●未来材料・システム研究所長

興戸 正純
(おきど まさずみ)



専門分野：材料加工、表界面工学
(略歴)

昭和54年4月 名古屋大学工学部助手
昭和63年10月 名古屋大学工学部講師
平成5年4月 名古屋大学工学部助教授
平成7年4月 名古屋大学理工学総合研究センター教授
平成14年4月 名古屋大学大学院工学研究科教授
平成24年4月 名古屋大学エコトピア科学研究科教授
平成25年4月 名古屋大学エコトピア科学研究所副所長
平成27年4月 名古屋大学エコトピア科学研究所長
平成27年10月 名古屋大学未来材料・システム研究所長

●宇宙地球環境研究所長

町田 忍
(まちだしのぶ)



専門分野：磁気圏物理学
(略歴)

昭和57年4月 日本学術振興会特定領域奨励研究員
昭和59年4月 宇宙科学研究所研究生
昭和59年10月 アイオワ大学物理天文学部 Research Investigator
昭和61年7月 アイオワ大学物理天文学部 Assistant Research Scientist
昭和63年3月 宇宙科学研究所助手
平成3年10月 宇宙科学研究所助教授
平成5年1月 京都大学理学部助教授
平成7年4月 京都大学大学院理学研究科助教授
平成12年4月 京都大学大学院理学研究科教授
平成25年4月 名古屋大学太陽地球環境研究所教授
平成27年4月 名古屋大学太陽地球環境研究所長
平成27年10月 名古屋大学宇宙地球環境研究所長

●総務部長

木下 孝洋
(きのした たかひろ)



(略歴)

昭和56年5月 宮崎医科大学
平成2年4月 文化庁文化財保護部美術工芸課
平成5年4月 文部省大臣官房人事課
平成9年4月 放送大学学園総務部総務課人事係長
平成12年4月 文部省大臣官房人事課福祉班専門職員
平成13年1月 文部科学省大臣官房人事課総務班文書情報管理係長
平成14年4月 文部科学省大臣官房人事課総務班総務係長
平成16年4月 文部科学省大臣官房人事課専門官
平成17年4月 国立科学博物館経営管理部管理課長
平成18年4月 国立科学博物館経営管理部経営管理課長
平成19年4月 東京大学人事課人事課長
平成19年7月 東京大学本部人事企画グループ長
平成21年4月 文部科学省大臣官房総務課行政改革推進室室長補佐
平成24年4月 文部科学省大臣官房人事課総務班主査
平成26年4月 一橋大学総務部長
平成28年4月 名古屋大学総務部長

●財務部長

佐々木 強
(ささき つよし)



(略歴)

昭和62年4月 電気通信大学庶務課
昭和62年5月 電気通信大学会計課
平成2年4月 文部省大臣官房会計課
平成6年7月 文部省大臣官房会計課総務班決算係主任
平成7年5月 文部省大臣官房会計課総務班監査係主任
平成8年4月 文部省大臣官房会計課総務班法規係主任
平成9年4月 文部省大臣官房会計課総務班監査係長
平成11年4月 文部省大臣官房会計課管財班管財第三係長
平成12年1月 文部省大臣官房会計課管財班管財第一係長
平成12年10月 国立天文台管理部会計課長
平成14年4月 文部科学省研究振興局研究環境・産業連携課
技術移転推進室室長補佐
平成16年4月 文部科学省大臣官房会計課専門官
平成20年4月 文部科学省大臣官房会計課用度班主査
平成20年12月 文部科学省大臣官房会計課監査班主査
平成23年4月 岩手大学財務部長
平成26年4月 国立天文台事務部長
平成28年4月 名古屋大学財務部長

新任部局長等の紹介

●研究協力部長

吉野 明
(よしの あきら)



〈略歴〉
 平成2年4月 神戸大学医学部附属病院
 平成4年4月 文部省学術国際局研究機関課
 平成6年4月 文部省学術国際局学術情報課
 平成8年4月 文部科学省大臣官房総務課
 平成9年4月 文部省学術国際局研究助成課
 平成15年4月 日本学術振興会研究事業部研究助成課次長
 平成17年4月 大学評価・学位授与機構評価事業部評価第3課長
 平成19年4月 文部科学省科学技術・学術政策局調査調整課課長補佐
 平成19年10月 文部科学省科学技術・学術政策局調査調整課競争の資金調整室競争の資金調査官
 平成21年7月 文部科学省科学技術・学術政策局調査調整課競争の資金調整室室長補佐
 平成22年4月 日本学術振興会研究事業部研究助成第一課長
 平成24年4月 日本学術振興会研究事業部研究事業課長
 平成26年4月 東京工業大学研究推進部長
 平成28年4月 名古屋大学研究協力部長

●研究所事務部長

村井 澄夫
(むらい すみお)



〈略歴〉
 昭和56年4月 名古屋大学厚生課
 昭和59年5月 名古屋大学教養部・総合言語センター
 平成元年6月 名古屋大学理学部
 平成4年5月 名古屋大学学生課
 平成8年5月 名古屋大学学務課
 平成10年4月 放送大学学園愛知地域学習センター専門職員
 平成10年4月 放送大学学園愛知学習センター教務係長
 平成13年4月 名古屋大学総務部総務課法規企画掛長
 平成14年2月 名古屋大学総務部総務課法規掛長
 平成16年4月 名古屋大学総務企画部企画課専門員
 平成16年7月 豊田工業高等専門学校庶務課長
 平成20年1月 浜松医科大学総務部総務課長
 平成23年4月 三重大学企画総務部人事課長
 平成26年4月 三重大学企画総務部副部長
 平成28年4月 名古屋大学研究所事務部長

資料

役員等

| | |
|------------------------------|-------------|
| 総長 | 松尾 清一 |
| 理事 (研究・学生担当)・副総長 | 國枝 秀世 |
| 理事 (国際・広報担当)・副総長 | 渡辺 芳人 |
| 理事 (総務・教育・組織改革・学術情報基盤担当)・副総長 | 松下 裕秀 |
| 理事 (法務・人権・リスク管理・内部統制担当)・副総長 | 市橋 克哉 |
| 理事 (財務・施設整備担当)・副総長 | 木村 彰吾 |
| 理事 (人事労務・環境安全・事務総括担当)・事務局長 | 竹下 典行 |
| 理事 (大学運営担当) | 郷 通子 (学外)† |
| 監事 | 熊田 一充 (学外) |
| 監事 | 中谷 聡子 (学外)† |
| 副総長 (学術研究・産学官担当) | 財満 鎮明 |
| 副総長 (評価・総合企画担当) | 前島 正義 |
| 副総長 (入試・組織改革・学生支援・図書館担当) | 木俣 元一 |

| | |
|----------------|--------------------|
| 副理事 (国際関係担当) | 磯田 文雄 |
| 副理事 (病院担当) | 石黒 直樹 |
| 副理事 (男女共同参画担当) | 東村 博子 |
| 副理事 (研究力強化担当) | 藤巻 朗 |
| 副理事 (国際貢献担当) | 岡田 亜弥 |
| 参与 | 山田 直 (学外)† |
| 参与 | 伊藤 勝基 (学外)† |
| 参与 | 小川 宏嗣 (学外)† |
| 参与 | 房村 精一 (学外)† |
| 参与 | 徳川 義崇 (学外)† |
| 参与 | Giles Clarke (学外)† |
| 参与 | 鮎京 正訓 (学外)† |
| 参与 | 山本 一良 (学外)† |

†印は非常勤

経営協議会委員

| 学外委員 | |
|---------------------|-------|
| トヨタ自動車株式会社代表取締役会長 | 内山田竹志 |
| 中部電力株式会社顧問 | 川口 文夫 |
| 国立病院機構名古屋医療センター名誉院長 | 齋藤 英彦 |
| 株式会社中日新聞社相談役 | 坂井 克彦 |
| 日本ガイシ株式会社相談役 | 柴田 昌治 |
| 丹羽連絡事務所代表 | 丹羽宇一郎 |
| 日本アイ・ビー・エム株式会社副会長 | 橋本 孝之 |
| 東海旅客鉄道株式会社特別顧問 | 松本 正之 |

(五十音順)

| 学内委員 | |
|----------|-------|
| 総長 | 松尾 清一 |
| 理事・副総長 | 國枝 秀世 |
| 理事・副総長 | 渡辺 芳人 |
| 理事・副総長 | 松下 裕秀 |
| 理事・副総長 | 木村 彰吾 |
| 理事・事務局長 | 竹下 典行 |
| 医学部附属病院長 | 石黒 直樹 |

教育研究評議会評議員

| | |
|------------|-------|
| 総長 | 松尾 清一 |
| 理事 | 國枝 秀世 |
| 理事 | 松下 裕秀 |
| 理事 | 市橋 克哉 |
| 文学研究科長 | 佐久間淳一 |
| 教育発達科学研究科長 | 氏家 達夫 |
| 法学研究科長 | 石井 三記 |
| 経済学研究科長 | 野口 晃弘 |
| 情報文化学部長 | 黒田 達朗 |
| 理学研究科長 | 松本 邦弘 |
| 医学系研究科長 | 高橋 雅英 |
| 工学研究科長 | 新美 智秀 |
| 生命農学研究科長 | 川北 一人 |
| 国際開発研究科長 | 伊東 早苗 |

| | |
|---------------|-------|
| 多元数理科学研究科長 | 納谷 信 |
| 国際言語文化研究科長 | 福田 真人 |
| 環境学研究科長 | 神沢 博 |
| 情報科学研究科長 | 安田 孝美 |
| 創薬科学研究科長 | 人見 清隆 |
| 環境医学研究所長 | 山中 宏二 |
| 未来材料・システム研究所長 | 興戸 正純 |
| 宇宙地球環境研究所 | 町田 忍 |
| 附属図書館長 | 森 仁志 |
| 医学部附属病院院長 | 石黒 直樹 |
| 総合保健体育科学センター長 | 押田 芳治 |
| 文学研究科 | 齋藤 文俊 |
| 教育発達科学研究科 | 伊藤 彰浩 |
| 法学研究科 | 愛敬 浩二 |

| | |
|--------------|-------|
| 経済学研究科 | 福澤 直樹 |
| 理学研究科 | 杉山 直 |
| 医学系研究科 | 藤本 豊士 |
| 工学研究科 | 田川 智彦 |
| 生命農学研究科 | 下村 吉治 |
| 国際開発研究科 | 藤川 清史 |
| 多元数理科学研究科 | 岡田 聡一 |
| 国際言語文化研究科 | 長畑 明利 |
| 環境学研究科 | 西澤 泰彦 |
| 情報科学研究科 | 村瀬 洋 |
| 創薬科学研究科 | 饗場 浩文 |
| 教育研究共同施設連合選出 | 町田 健 |
| 教育研究共同施設連合選出 | 野尻 伸一 |

総長補佐

| | |
|----------------|-----------|
| 研究推進担当 | 一村 信吾 |
| 研究推進担当 | 門松 健治 |
| 研究推進担当 | 田中健太郎 |
| 研究推進担当 | 西山 崇志 |
| 国際化推進担当 | 土井 康裕 |
| コンソーシアム・国際広報担当 | 岩城 奈巳 |
| アジア戦略担当 | 中野 秀雄 |
| 国際機構担当 | 中東 正文 |
| G30担当 | サイモン ウォリス |

| | |
|-------------------|-------|
| 教育担当、評価担当 | 戸田山和久 |
| 教育組織改革担当、総合企画調査担当 | 松浦 重和 |
| 人権担当 | 福澤 直樹 |
| 人権担当 | 渡部美由紀 |
| 施設整備担当 | 奥宮 正哉 |
| 財務担当 | 根本 二郎 |
| 災害対策担当 | 鈴木 康弘 |
| 労働安全担当 | 村田 静昭 |
| 研究・教育支援担当 | 松村 年郎 |

| | |
|-------------|-------|
| 産学官連携担当 | 水野 正明 |
| 産学官連携担当 | 廣明 秀一 |
| 産学官連携担当 | 石川 隆司 |
| 社会連携・社会貢献担当 | 宇澤 達 |
| 国際産学連携担当 | 神山 知久 |
| 評価担当 | 横溝 大 |
| 評価担当 | 長谷川好規 |
| 入試担当 | 石井 秀宗 |

部局長等

| | | |
|-------|-----------|--------|
| 本部 | | |
| 事務局 | 事務局長 | 竹下 典行 |
| 総務部 | 総務部長 | 木下 孝洋 |
| | 総務課長 | 市川 真康 |
| | 人事課長 | 原 盛将 |
| | 人事主幹 | 遠藤 典子 |
| | 職員課長 | 樋田 浩和 |
| | 広報渉外課長 | 福地 克美 |
| | 渉外主幹 | 廣川 光之 |
| 企画部 | 企画部長 | 松浦 重和 |
| | 企画課長 | 廣石 孝 |
| | 企画主幹 | 伊藤 誠 |
| 財務部 | 財務部長 | 佐々木 強 |
| | 財務課長 | 渡邊 千夏 |
| | 財務調整主幹 | 岡部 衛 |
| | 経理・資産管理課長 | 村手 隆司 |
| | 契約課長 | 佐田 隆昭 |
| 教育推進部 | 教育推進部長 | 三枝 広人 |
| | 教育監 | 高下 一磨 |
| | 基盤運営課長 | 河合 泰和 |
| | 事業推進課長 | 鎌澤かおり |
| | 国際主幹 | 篠原 量紗 |
| | 教育企画課長 | 室屋 守男 |
| | 共通教育推進主幹 | 今枝 明光 |
| | 学生支援課長 | 大脇 申子男 |
| | 学生交流課長 | 浅野 国裕 |
| | 入試課長 | 武藤 英幸 |
| | 国際入試主幹 | 小崎 光芳 |

| | | |
|----------------|----------|-----------------|
| 研究協力部 | 研究協力部長 | 吉野 明 |
| | 研究協力部次長 | 加藤 滋 |
| | 研究支援課長 | 荒木 正寛 |
| | 社会連携課長 | 堂前 弘樹 |
| 施設管理部 | 施設管理部長 | 小松 幸雄 |
| | 施設企画課長 | 向井 和人 |
| | 施設整備課長 | 園田 秀久 |
| | 施設管理課長 | 袴田 満明 |
| | 環境安全支援課長 | 岩佐 智 |
| | 運営支援組織 | 学術研究・産学官連携推進本部長 |
| 国際機構長 | | 渡辺 芳人 |
| 情報連携統括本部長 | | 松下 裕秀 |
| 情報推進部長 | | 山崎 信広 |
| 情報推進課長 | | 古橋 悟志 |
| 情報基盤課長 | | 服部 昌祐 |
| 環境安全衛生推進本部長 | | 竹下 典行 |
| 防災推進本部長 | | 竹下 典行 |
| IR 本部長 | | 松尾 清一 |
| キャンパスマネジメント本部長 | | 木村 彰吾 |
| 教育基盤連携本部長 | | 松下 裕秀 |
| 施設・環境計画推進室長 | | 奥宮 正哉 |
| 核燃料管理施設長 | | 榎田 洋一 |
| 評価企画室長 | | 前島 正義 |
| ハラスメント相談センター長 | 石黒 洋 | |
| 社会連携推進室長 | 宇澤 達 | |
| 災害対策室長 | 飛田 潤 | |
| 男女共同参画室長 | 東村 博子 | |
| 法務室長 | 市橋 克哉 | |

資料

| | | | | | | |
|--------------------------|------------------------|----------------------|-----------------------|----------------------|--------------------|-----------|
| 運営支援組織 | リスク管理室長 | 市橋 克哉 | 多元数理科学研究科 | 多元数理科学研究科長 | 納谷 信 | |
| | 総合企画室長 | 前島 正義 | | 国際言語文化研究科 | 国際言語文化研究科長 | 福田 真人 |
| | PhD 登龍門推進室長 | 前島 正義 | | | 附属グローバルメディア研究センター長 | 中村登志哉 |
| | 動物実験支援センター長 | 國枝 秀世 | | 環境学研究科 | 環境学研究科長 | 神沢 博 |
| | 大学文書資料室長 | 竹下 典行 | | | 附属地震火山研究センター長 | 山岡 耕春 |
| | 国際共同教育研究プログラム推進室長 | 國枝 秀世 | | | 附属持続的共発展教育研究センター長 | 久野 覚 |
| | 監査室 | 障害者支援室長 | | 木俣 元一 | 情報科学研究科 | 環境学研究科事務長 |
| 監査室長 | | 市橋 克哉 | 情報科学研究科長 | 安田 孝美 | | |
| 文学研究科・文学部 | 監査室主幹 | 林 正康 | 創薬科学研究科 | 附属組込みシステム研究センター長 | 高田 広章 | |
| | 文学研究科長・文学部長 | 佐久間淳一 | | 創薬科学研究科長 | 人見 清隆 | |
| | 附属「アジアの中の日本文化」研究センター長 | 藤木 秀朗 | 創薬科学研究科・細胞生理学研究センター主幹 | 林 明美 | | |
| 教育発達科学研究科・教育学部 | 附属人類文化遺産テクスト学研究センター長 | 阿部 泰郎 | 教養教育院 | 教養教育院長 | 戸田山和久 | |
| | 教育発達科学研究科長・教育学部長 | 氏家 達夫 | | アジアサテライトキャンパス学院 | アジアサテライトキャンパス学院院长 | 磯田 文雄 |
| | 附属中学校長 | 松田 武雄 | 高等研究院 | 高等研究院長 | 篠原 久典 | |
| 附属高等学校長 | 松田 武雄 | トランスフォーメティブ生命分子研究所 | | トランスフォーメティブ生命分子研究所長 | 伊丹健一郎 | |
| 法学研究科・法学部 | 法学研究科長・法学部長 | 石井 三記 | 環境医学研究所 | 環境医学研究所長 | 山中 宏二 | |
| | 附属法情報研究センター長 | 増田 知子 | | 附属次世代創薬研究センター長 | 澤田 誠 | |
| 経済学研究科・経済学部 | 経済学研究科長・経済学部長 | 野口 晃弘 | 未来材料・システム研究所長 | 未来材料・システム研究所長 | 興戸 正純 | |
| | 附属国際経済政策研究センター長 | 山田 基成 | | 附属未来エレクトロニクス集積研究センター | 天野 浩 | |
| 文系事務部 | 事務部長 | 斉藤 肇 | | 附属高度計測技術実践センター | 八木 伸也 | |
| | 総務課長 | 高田 義雅 | 宇宙地球環境研究所 | 宇宙地球環境研究所長 | 町田 忍 | |
| | 経理課長 | 市岡 浩之 | 附属国際連携研究センター | 塩川 和夫 | | |
| | 教務課長 | 中瀨 定美 | 附属統合データサイエンスセンター | 草野 完也 | | |
| 情報文化学部 | 情報文化学部長 | 黒田 達朗 | 研究所事務部 | 附属飛翔体観測推進センター | 高橋 暢宏 | |
| | 情報文化学部・情報科学研究科事務長 | 合田由美子 | | 事務部長 | 村井 澄夫 | |
| 理学研究科・理学部 | 理学研究科長・理学部長 | 松本 邦弘 | 附属図書館 | 総務課長 | 坪井 直志 | |
| | 附属臨海実験所長 | 澤田 均 | | 経理課長 | 坂口 敏弘 | |
| | 附属南半球宇宙観測研究センター長 | 福井 康雄 | 学内共同教育研究施設等 | 附属図書館長 | 森 仁志 | |
| | 附属構造生物学研究センター長 | 本間 道夫 | | 医学部分館長 | 濱嶋 信之 | |
| | 附属タウ・レプトン物理研究センター長 | 原田 正康 | | 研究開発室長 | 森 仁志 | |
| | 理学部・理学研究科・多元数理科学研究科事務長 | 齋藤 勝行 | | 附属図書館事務部長 | 大西 直樹 | |
| | 医学系研究科・医学部 | 医学系研究科長・医学部長 | | 高橋 雅英 | 情報管理課長 | 竹谷喜美江 |
| 附属医学教育研究支援センター長 | 門松 健治 | 附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター長 | 情報サービス課長 | 高野 恵子 | | |
| 医学部附属病院長 | 石黒 直樹 | 医学部・医学系研究科事務部長 | 情報システム課長（事務取扱） | 大西 直樹 | | |
| 工学研究科・工学部 | 事務部次長 | 吉田 勇人 | アイソトープ総合センター長 | 本間 道夫 | | |
| | 総務課長 | 永家 清考 | 遺伝子実験施設長 | 木下 俊則 | | |
| | 人事労務課長 | 仲井 精一 | 物質科学国際研究センター長 | 阿波賀邦夫 | | |
| | 学務課長 | 西尾 哲也 | 高等教育研究センター長 | 水谷 法美 | | |
| | 経営企画課長 | 内出 裕之 | 農学国際教育協力研究センター長 | 山内 章 | | |
| | 経理課長 | 安田 浩明 | 博物館長 | 大路 樹生 | | |
| | 施設管理主幹 | 近藤 正仁 | 心の発達支援研究実践センター長 | 金井 篤子 | | |
| | 医事課長 | 佐野 立明 | 法政国際教育協力研究センター長 | 小畑 郁 | | |
| | 医療業務支援課長 | 金永 博行 | 生物機能開発利用研究センター長 | 中園 幹生 | | |
| | 大幸地区事務統括課長 | 坪井 信治 | シンクロトロン光研究センター長 | 曾田 一雄 | | |
| | 生命農学研究科・農学部 | 大幸地区事務統括課長 | 棚瀬 隆夫 | 基礎理論研究センター長 | 野尻 伸一 | |
| | | 工学研究科長・工学部長 | 新美 智秀 | 現象解析研究センター長 | 飯嶋 徹 | |
| | | 附属プラズマナノ工学研究センター長 | 大野 哲靖 | 減災連携研究センター長 | 福和 伸夫 | |
| 附属材料バックキャストテクノロジー研究センター長 | | 小橋 眞 | 細胞生理学研究センター長 | 廣明 秀一 | | |
| 附属計算科学連携教育研究センター長 | | 岡崎 進 | 脳とこころの研究センター長 | 長縄 慎二 | | |
| 附属マイクロ・ナノメカトロニクス研究センター長 | | 新井 史人 | ナショナルコンポジットセンター長 | 佐宗 章弘 | | |
| 工学部・工学研究科事務部長 | | 大矢 淳一 | 予防早期医療創成センター長 | 門松 健治 | | |
| 国際開発研究科 | 総務課長 | 塚崎 一彦 | 学生相談総合センター長 | 植田 健男 | | |
| | 経理課長 | 澤村 明都 | 共同利用・共同研究拠点 | 情報基盤センター長 | 森 健策 | |
| | 教務課長 | 宮崎 洋介 | 総合保健体育科学センター | 総合保健体育科学センター長 | 押田 芳治 | |
| | 生命農学研究科長・農学部長 | 川北 一人 | 未来社会創造機構 | 未来社会創造機構長 | 財満 鎮明 | |
| 附属フィールド科学教育研究センター長 | 戸丸 信弘 | モビリティ領域長 | モビリティ領域長 | 市野 良一 | | |
| 附属鳥類バイオサイエンス研究センター長 | 松田 洋一 | 社会イノベーションデザイン学センター長 | 社会イノベーションデザイン学センター長 | 齋藤 永宏 | | |
| 農学部・生命農学研究科事務長 | 松岡真一郎 | 素粒子宇宙起源研究機構 | 素粒子宇宙起源研究機構長 | 益川 敏英 | | |
| 国際開発研究科長 | 伊東 早苗 | 全学技術センター | 全学技術センター長 | 竹下 典行 | | |

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成28年3月16日～4月15日]

| 記事 | 月日 | 新聞等名 |
|---|----------------------------------|-------------------------------|
| 1 時のおもり：社会が呈する末期症状 悪貨は良貨を駆逐する 池内 了本学名誉教授 | 3.16 (水) | 中日 (朝刊) |
| 2 2016年度日本学士院エジンバラ公賞：松岡 信生物機能開発利用研究センター教授 | 3.16 (水) | 日刊工業 |
| 3 この道④益川敏英本学特別教授：平和憲章 | 3.16 (水) | 中日 (夕刊) |
| 4 第32回博物館企画展「ボタニカルアート作品展」「伊藤篤太郎生誕150年—初めて植物に学名をつけた日本人—」開催：2月4日～4月5日 | 3.16 (水) 3.23 (水) 3.30 (水) | 朝日 (夕刊) 朝日 (夕刊) 朝日 (夕刊) |
| 5 中嶋哲彦教育発達科学研究科教授は高校生の校外での政治活動で学校への事前届け出を義務付けるかどうかについて「届け出の要否は学校ごとに判断すべきこと、教育委員会から学校への指導、助言はあっていいが、それは判断材料を与える範囲にとどめるべき」と語る | 3.17 (木) | 中日 (朝刊) |
| 6 最上段 思わず「怖い!!」「組み体操」本当に危ないの？ 記者が体験 最下段になった内田 良教育発達科学研究科准教授は「尋常じゃない重みで、全身がつぶれそうだった」と語る | 3.17 (木) | 中日 (朝刊) |
| 7 教育@とうかい：国際協力「仲間増やす」吉野裕斗さん教育学部附属高等学校生が国際支援の現場を学ぶため、8ヶ月半の世界一周の旅を終え、12日に帰国報告会を開いた | 3.17 (木) | 読売 |
| 8 ひと：国際支援の現場を見に世界29カ国をまわった高校生 吉野裕斗さん教育学部附属高等学校生 | 3.17 (木) | 朝日 (朝刊) |
| 9 経済観測：「動物の血」を抑えるには 丹羽宇一郎本学名誉博士 | 3.17 (木) | 毎日 (朝刊) |
| 10 この道②益川敏英本学特別教授：科学とスパイ | 3.17 (木) | 中日 (夕刊) |
| 11 小島勢二医学系研究科教授のグループは「先天性免疫不全症」の原因となる遺伝子を素早く解析する診断法を開発 | 3.18 (金) | 中日 (朝刊) |
| 12 小島勢二医学系研究科教授が準備をすすめる名古屋小児がん基金が5月に発足する見通しになった | 3.18 (金) | 中日 (朝刊) |
| 13 岡崎恒子名古屋大学名誉教授文化功労者顕彰を祝す会開催：23日 岡崎恒子本学名誉教授の特別教授の称号授与式に続き講演会が行われる | 3.18 (金) | 中日 (朝刊) |
| 14 朝日カルチャーセンター名古屋：美と芸術の哲学～カント、ヘーゲルの美学 宮原 勇文学研究科教授 | 3.18 (金) | 朝日 (朝刊) |
| 15 この道③益川敏英本学特別教授：恩師の言葉 | 3.18 (金) | 中日 (夕刊) |
| 16 この道④益川敏英本学特別教授：200年後 | 3.19 (土) | 中日 (夕刊) |
| 17 赤崎 勇本学特別教授、天野 浩未来材料・システム研究所教授らの青色LEDの研究が「物理基礎」や「化学基礎」などの教科書に掲載が決まり天野 浩同教授は「LEDを次への足掛かりにして」と語る | 3.19 (土) | 中日 (朝刊) |
| 18 中嶋哲彦教育発達科学研究科教授は教科書検定について「多様な見方が載っていない教科書で学べば、子どもたちも一面的な考えしかできなくなる」と語る | 3.19 (土) | 中日 (朝刊) |
| 19 厚生労働省は2月に実施した医師国家試験について本学の合格率は91.4%だったと発表 | 3.19 (土) | 中日 (朝刊) |
| 20 紙つぶて：冬の猫と犬の数学 四方義啓本学名誉教授 | 3.19 (土) | 中日 (夕刊) |
| 21 文部科学省は省エネルギー社会の実現に資する次世代半導体研究開発の16年度採択期間6件を決定し、中核拠点実施機関に名古屋大学（代表者天野 浩未来材料・システム研究所教授）、パワーデバイス・システム領域実施機関に名古屋大学（代表者加地 徹未来材料・システム研究所特任教授）を選んだ | 3.21 (月) 3.25 (金) | 日経 (朝刊) 科学新聞 |
| 22 本学や公立はこだて大学、東京工業大学などのグループはAIを使って創作した短編小説が「星新一賞」の1次審査に通過したことを明らかにし、創作に携わった佐藤理史工学研究科教授は『コンピューターが書いた』というより『コンピューターで書いた』という段階」と語る | 3.22 (火) | 朝日 (朝刊) |
| 23 本学など全国の国立大学のうち11校で求人と実際の労働条件の食い違いに関する相談が学生から寄せられていたことが分かった | 3.22 (火) | 中日 (朝刊) 中部経済新聞 |
| 24 日経実力病院調査 頭頸部がんと急性白血病：医学部附属病院の実績が取り上げられる | 3.22 (火) | 日経 (朝刊) |
| 25 深層断面：航空機・車・鉄道 素材 開発最前線—強く・軽く 新構造材料技術研究組合に本学が参画 | 3.22 (火) | 日刊工業 |
| 26 新技術開発財団 第48回受賞業績 市村学術賞功績賞：竹岡敬和工学研究科准教授 | 3.22 (火) | 日刊工業 |
| 27 この道⑤益川敏英本学特別教授：井の中の蛙 | 3.22 (火) | 中日 (夕刊) |
| 28 第53回読売農学賞：松岡 信生物機能開発利用研究センター教授 | 3.22 (火) 4. 6 (水) | 読売 読売 |
| 29 本学に産業技術総合研究所の研究拠点が設置される | 3.23 (水) | 日経 (朝刊) |
| 30 この人：菅 なな子さん経済学部1年生が「アイドル受験戦記」を出版 | 3.23 (水) | 中日 (朝刊) |
| 31 この道⑥益川敏英本学特別教授：ドンキホーテ | 3.23 (水) | 中日 (夕刊) |
| 32 馬場嘉信工学研究科教授と長谷川好規医学系研究科教授らと愛知県は細胞から肺がんの原因となる異常なタンパク質を短時間で検出し、抗がん剤の効果の有無を素早く判断して適切な治療につなげる検査装置を開発した | 3.24 (木) 3.31 (木) | 中日 (朝刊) 日刊工業 |
| 33 岡崎恒子名古屋大学名誉教授文化功労者顕彰を祝す会開催：23日 岡崎恒子本学名誉教授の特別教授の称号授与式に続き、講演会が行われた | 3.24 (木) | 中日 (朝刊) |
| 34 本学中国交流センターと愛知大学上海交流センターが中国からの留学生や若手起業家の受け入れ拡大、上海での両大学の学生インターンシップの充実などで連携を深めていくことで合意した | 3.24 (木) | 中日 (朝刊) |

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成28年3月16日～4月15日]

| 記事 | 月日 | 新聞等名 |
|---|----------------------|---------------------------|
| 35 この道⑦益川敏英本学特別教授：棚上げ | 3.24 (木) | 中日 (夕刊) |
| 36 木山博資医学系研究科教授らのグループは神経因性の先天性多発性関節拘縮症の原因を解明 | 3.25 (金) | 科学新聞 |
| 37 文部科学省が重点支援制度の審査結果を発表し本学は所定の削減分に対する再配分額の割合が100.2%で交付額が増額 | 3.25 (金) | 読売 |
| 38 ミクロの探検隊⑧ ホニュウ類の組織を電子顕微鏡で見よう開催：4月9日 博物館で行われる | 3.25 (金) | 読売 |
| 39 この道⑧益川敏英本学特別教授：英語は大事 | 3.25 (金) | 中日 (夕刊) |
| 40 平成27年度名古屋大学卒業式開催：25日 松尾総長は「『多様性の許容と共働による創造』という視点を持って、自分自身に一層磨きをかけてほしい」と語る | 3.25 (金) 3.26 (土) | 毎日 (夕刊) 他2社 読売 |
| 41 この道⑨益川敏英本学特別教授：まだ謎解き | 3.26 (土) | 中日 (夕刊) |
| 42 東村副理事・生命農学研究科教授は女性が活躍しやすい職場環境が社会や男性の働き方にもたらす効果について「企業に生活者目線の多様な価値観が生まれ、新しいサービスや製品の開発につながる」と語る | 3.26 (土) | 中日 (朝刊) |
| 43 内田 良教育発達科学研究科准教授はスポーツ庁が国として初めて組み体操について指針を示したことについて「国には具体的な安全指導の方法を示してほしい」と語る | 3.26 (土) | 中日 (朝刊) |
| 44 紙つぶて：言葉の最適化 四方義啓本学名誉教授 | 3.26 (土) | 中日 (朝刊) |
| 45 伊勢志摩サミット開催記念《中部の輝く女性》サミット開催：4月23日 東村副理事・生命農学研究科教授が基調講演 | 3.27 (日) | 中日 (朝刊) |
| 46 第75回中日農業賞：審査委員長生源寺眞一生命農学研究科教授が「多彩な取り組みがあったが、日本農業を支える本気度ときまじめさは共通。それぞれ家族や職員と力を合わせ、味わい深い成果を生み出した」と講評 | 3.27 (日) | 中日 (朝刊) |
| 47 本学で公道での走行実験に乗り出している自動運転車について、東京海上日動火災保険が損害保険を今月末に国内で初めて発売する | 3.28 (月) | 読売 |
| 48 第12回キャンパスベンチャーグランプリ全国大会：審査委員会特別賞 松下 健さん本学大学院生 | 3.28 (月) | 日刊工業 |
| 49 松本浩典現象解析研究センター准教授はX線天文衛星「ひとみ」からの電波が受信できなくなり、軌道近くに5個の物体があるのを確認したことについて「これから本格的な観測に入るところだった。何とか衛星が通信できる状況になってほしい」と語る | 3.28 (月) | 中日 (夕刊) |
| 50 第59回げんさいカフェ「建物の揺れと地面の揺れはどう違う？」開催：4月13日 護 雅史減災連携研究センター特任教授が講演 | 3.29 (火) | 中日 (朝刊) |
| 51 ただ今就活中：内定学生たちが「就援団」本学や名古屋工業大学などの学生が参加し企業に内定した学生が就活に役立つ体験などを下級生に伝えるネットワーク組織「就援団」を結成 | 3.29 (火) | 中日 (朝刊) |
| 52 Culture：和本学べば広がる世界 日本近世文学会の出前授業が教育学部附属中・高等学校で開かれ加藤直志教育学部附属高等学校教諭は「新学習要領では、文法偏重ではなく古典に親しむ授業がこれまで以上に求められる」と語る | 3.30 (水) | 中日 (朝刊) |
| 53 学校法人市邨学園は新理事長に常務理事・副学園長末岡 仁氏本学人間情報学研究科修士を選出 | 3.30 (水) | 中部経済新聞 |
| 54 OIST フォーラム2016：日本の未来をどう築くーイノベーションをもたらす科学とは？ー 開催：10日 郷理事がパネルディスカッションに参加 | 3.30 (水) | 朝日 (朝刊) |
| 55 本学とトヨタ自動車株式会社などが過疎地に住む高齢者らに新たな移動手段を提供する実証実験を始める | 3.30 (水) 3.31 (木) | 朝日 (朝刊) 他2社 中日 (朝刊) |
| 56 本学で私立名古屋中学校の英語交流プログラムがあり、3年生20人が本学の留学生ら6人と減災や環境、エネルギーを題材に意見交換した | 3.31 (木) | 中日 (朝刊) |
| 57 本学は2017年度からの組織再編案を発表し、文学部を4つのコース制にするほか、大学院に人文学研究科を新設し、文学研究科と国際言語文化研究科、国際開発研究科の一部を統合する | 4. 1 (金) | 中日 (朝刊) |
| 58 天野 浩未来材料・システム研究所教授がプロ野球中日対広島戦の始球式を務め「何年か調子が悪いが、今年こそは優勝してほしい」と語る | 4. 1 (金) | 中日 (朝刊) |
| 59 鈴木敦明環境学研究科准教授のグループは何度裏切られて見た目でも人を信頼し続ける高齢者の特長を明らかにした | 4. 2 (土) | 朝日 (朝刊) |
| 60 鷺谷 威減災連携研究センター教授は4月1日に起こった和歌山県沖の地震について「フィリピン海プレートの内部で起き、すぐに南海トラフ地震に結び付くことはない」との見解を示した | 4. 2 (土) | 中日 (朝刊) |
| 61 薩摩義士の物語⑧：2つの異なる展示 羽賀祥二文学研究科教授の「宝暦治水」の顕彰運動の検証を参考に展示内容に反映 | 4. 2 (土) | 読売 |
| 62 本学が近年発掘した世界的にも基調な藻類化石「チンギスカーニア」が名古屋市科学館で開催されている特別展「恐竜・化石研究所」で6日から展示される | 4. 2 (土) | 読売 |
| 63 先端人：伊丹健一郎トランスフォーマティブ生命分子研究所教授 触媒の妙 世界を変える | 4. 3 (日) | 朝日 (朝刊) |
| 64 病院の実力：眼科 本学の治療実績が取り上げられる | 4. 3 (日) | 読売 |
| 65 起業家魂 (3)：新型磁気センサーで世界市場へ 本学や豊田工業大学と共同でマグネデザイン株式会社は新原理の超高感度磁気センサーを開発した | 4. 4 (月) | 中部経済新聞 |

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成28年3月16日～4月15日]

| 記事 | 月日 | 新聞等名 |
|--|----------------------|--------------------------|
| 66 職業教育特化の新大学 寺田盛紀本学名誉教授 | 4. 4 (月) | 日経 (朝刊) |
| 67 日仏討論会「ビッグデータ 科学が約束する日常の革命とは？」開催：13日 パネリスト 武田一哉未来社会創造機構教授 | 4. 5 (火) | 中日 (朝刊) |
| 68 佐藤理史工学研究科教授などが作った人工知能で短編小説を自動生成するプログラムが解説される | 4. 5 (火) | 毎日 (夕刊) |
| 69 平成28年度入学式が開催され松尾総長は「グローバルにリーダーシップを発揮できる人材を育成したい」と祝辞を述べる | 4. 5 (火) 4. 6 (水) | 日経 (夕刊) 中日 (夕刊) 読売 |
| 70 山口颯也さん本学1年生は夏の参院選に対して「安保法を含めじっくり考えて一票を投じたい」と語る | 4. 6 (水) | 中日 (朝刊) |
| 71 守ろう憲法9条 東三河のつどい開催：10日 本 秀紀法学研究科教授が講演 | 4. 7 (木) | 毎日 (朝刊) |
| 72 本学などの研究チームは、関節リウマチの炎症が、糖鎖という物質の構造を変えることで抑えられることを発見 | 4. 7 (木) 4.10 (日) | 朝日 (朝刊) 中日 (朝刊) |
| 73 東山哲也トランスフォーマティブ生命分子研究所教授らのグループは、植物のめしべの中に、花粉を卵細胞と結びつける媚薬のような物質があることを突き止め「アモール」と名付けた | 4. 8 (金) | 中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) |
| 74 水素で治療 効果いかに 大野欽司医学系研究科教授は水素研究について糖尿病、脂質代謝異常、心停止後の病態、パーキンソン病などの疾患で試験が実施され「動物実験ほどではないが、ヒトでも一定の改善効果が見られている」と語る | 4. 9 (土) | 毎日 (朝刊) |
| 75 CBC テレビ番組審議会委員 再任 鈴木康弘減災連携研究センター教授 | 4. 9 (土) | 中日 (朝刊) |
| 76 本学で新入生を対象にした日本学生支援機構の奨学金説明会があり、約190人が参加した | 4. 9 (土) | 朝日 (朝刊) |
| 77 ピラミッド透視 大作戦 森島邦博未来材料・システム研究所特任助教は「物体の密度などによって、ミュオン粒子の透過量は変化する。ピラミッド内に未発見の空間があれば、その部分は周囲より透過量が多くなる」と語る | 4.10 (日) | 読売 |
| 78 ひらけ！進指針路：企業との共同研究件数トップ10で本学が457件で7番目に多いと取り上げられる | 4.10 (日) | 朝日 (朝刊) |
| 79 瀧口金吾理学研究科講師などのグループは細胞サイズの人工膜小胞を可逆的に繰り返し繰り返し変形させられることに成功 | 4.12 (火) | 中日 (朝刊) |
| 80 こころの減災研究会が「心の減災教育」の教材集を作製 | 4.12 (火) | 中日 (朝刊) |
| 81 天才たるゆえん アユコ24歳 ①二足のわらじ バスケ、短距離走が糧 日本郵政グループ鈴木亜由子氏本学卒業生 | 4.12 (火) | 中日 (朝刊) |
| 82 産業技術総合研究所・名古屋大学 窒化物半導体先進デバイスオープンイノベーションラボラトリ開所式開催：12日 天野 浩未来材料・システム研究所教授は「GaNを用いたパワーデバイスを世に送り出すいいチャンス」と語る | 4.13 (水) | 読売 他4社 |
| 83 新入生よ挑もう 大学トップ入学式メッセージ 松尾総長は「素晴らしい先達に続く若手・中堅研究者の育成にも力を注いでおり、彼らは素晴らしい研究成果を上げつつある」と語る | 4.13 (水) | 日経 (朝刊) |
| 84 東海テレビ番組審議会委員 再任 山岡耕春環境学研究科教授 | 4.13 (水) | 中日 (朝刊) |
| 85 春の園遊会招待者：岡崎恒子本学特別教授 | 4.13 (水) | 朝日 (朝刊) |
| 86 天才たるゆえん アユコ24歳 ②試練 2度の疲労骨折 苦しむ 日本郵政グループ鈴木亜由子氏本学卒業生 | 4.13 (水) | 中日 (朝刊) |
| 87 山本朗仁医学系研究科准教授の研究グループはヒト乳歯歯髄幹細胞の細胞培養液を使った新しい多発性硬化症の治療法を開発 | 4.14 (木) | 中日 (朝刊) |
| 88 進化するAIと共存するには 本学や東京大学のメンバーなどがAIと社会のかかわりを考える研究者有志の会「AIR」を開いている | 4.14 (木) | 朝日 (朝刊) |
| 89 経済サブリ：マイナス金利政策は経済学で説明に苦慮 生源寺眞一生命農学研究科教授 | 4.14 (木) | 中部経済新聞 |
| 90 日仏討論会「ビッグデータ 科学が約束する日常の革命とは？」開催：13日 武田一哉未来社会創造機構教授は「多様な価値観を支えるビッグデータ社会をつくる技術を開発したい」と語る | 4.14 (木) | 中日 (朝刊) |
| 91 天才たるゆえん アユコ24歳 ③復活 地道な努力 感謝を込め 日本郵政グループ鈴木亜由子氏本学卒業生 | 4.14 (木) | 中日 (朝刊) |
| 92 鷺谷 威減災連携研究センター教授は熊本益城町で最大震度7を観測した地震について「布田川・日奈久断層帯の一部が横ずれしたことによる地震ではないか」と語る | 4.15 (金) | 中日 (朝刊) 読売 |
| 93 伊勢志摩サミット：愛知県知事が在日の海外メディア向けの視察旅行で本学について「日本中から若く才能ある教授陣が集まり、自由に切磋琢磨できた」と語る | 4.15 (金) | 中日 (朝刊) |
| 94 乳がん相談会&親睦会：24日 角田伸行医学部附属病院病院講師が質問に公開で回答するほか、個別相談などを開く | 4.15 (金) | 朝日 (朝刊) |
| 95 天才たるゆえん アユコ24歳 ④自立「正解だった」名大進学 日本郵政グループ鈴木亜由子氏本学卒業生 | 4.15 (金) | 中日 (朝刊) |

第57回名大祭を6月2日(木)～6月5日(日)に開催

第57回名大祭を、6月2日(木)から5日(日)の間、東山キャンパスで開催します。

今年のテーマは「その躍動、無限大」です。

さまざまな企画を用意して、皆様のご来場をお待ちしております。

開催日程：6月2日(木)～5日(日)

会場：名古屋大学東山キャンパス

最寄駅：市営地下鉄名城線名古屋大学駅

(ご来場の際は公共交通機関をご利用ください)

●環境対策の取り組み

第57回名大祭では、環境保護への取り組みとしてごみの分別を徹底して行っています。また、模擬店での使用済みの油や割り箸、学内でのペットボトルキャップを回収して、リサイクルを行っています。油は塗料に、割り箸は再生紙にリサイクルしています。またペットボトルキャップは回収しリサイクルされ、得た収益でワクチンが購入されています。ご協力をお願い致します。

●第57回名大祭における食品の取扱いについて

第57回名大祭におきましても、前回までの模擬店衛生管理体制を見直し、改善を行い、さらなる万全な模擬店運営システムの確立に名大祭本部実行委員会一同努めております。

皆様に安心して名大祭を楽しんでいただけるよう、千種保健所のご指導の下、模擬店運営を行ってまいりますので、ご理解の程よろしくお願い致します。

●バリアフリーへの取り組み

第57回名大祭では、障がい者、子ども連れの方、妊婦、外国の方を含むすべての来場者の方々に名大祭を楽しんでもらえるように様々な取り組みを行っています。

多目的トイレや障害となる坂道などの場所を記したバリアフリーマップ、外国の方に役立つ英語マップを作成しています。また、各企画会場での優先席の設置の促進、案内所で車いす貸出しを行っています。

お問い合わせ

名古屋大学学生会館第7集会室

名大祭本部実行委員会

TEL 052-789-5178

mail mail@meidaisai.com

URL http://meidaisai.com

Twitter @meidaisai_NU



●講演会企画

「物理学者の夢見る世界～世界は素粒子で満ちている！～」
「地震のナゼ？ナニ？～いつくるの？南海トラフ地震～」

毎年好評の講演会企画を今年度は二つ開催致します。6月4日(土)にはノーベル物理学賞を受賞した益川敏英特別教授、素粒子宇宙起源研究機構基礎理論研究センター長である野尻伸一教授をお呼びし、素粒子をはじめとした物理学についての講演を行っていただきます。6月5日(日)には日本地震学会副会長でもある山岡耕春教授に、東海地域に甚大な被害をもたらすとされている南海トラフ地震についての講演を行っていただきます。奮ってご参加ください。

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

5月17日(火)

場 所：減災館 1階減災ホール
時 間：18:00~19:30
定 員：100名
対 象：一般
参 加 費：無料

第120回防災アカデミー

講 演 者：金子美香氏（清水建設株式会社安全安心技術センター所長）

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

5月18日(水)

場 所：学術総合センター 2階一橋講堂
（東京都千代田区）
時 間：14:00~17:00
定 員：500名
対 象：一般
参 加 費：無料

公開シンポジウム

「省エネルギー社会の実現に資する次世代半導体研究開発」

講演題目：「GaN による省エネルギー社会への貢献と事業構想」

講 演 者：天野 浩（未来材料・システム研究所教授）

内 容：講演、パネルディスカッション、他

[問い合わせ先]

研究協力部社会連携課
052-747-6584



5月19日(木)

場 所：理学南館 1階坂田・平田ホール
時 間：16:00~17:30
定 員：300名
対 象：一般
参 加 費：無料

第25回理学懇話会「謎の素粒子ニュートリノ」

講演題目：「ニュートリノ振動発見の光跡をたどる」

講 演 者：伊藤好孝（宇宙地球環境研究所教授）

[問い合わせ先]

理学部・理学研究科 052-789-2394



5月21日(土)、22日(日)

場 所：博物館 (5/21)、
名古屋駅周辺・栄地区 (名古屋市
中村区・中区) (5/22)
時 間：13:30~16:30 (5/21)、
9:30~15:00 (5/22)
定 員：30名
対 象：小学3年生以上、一般
（小学生は保護者同伴）
参 加 費：2,000円

第49回地球教室ーフィールドセミナーー

「ナゴヤで化石をさがそう！」

内 容：化石の断面について学習し建物の石材からさまざまな化石をさがす

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



5月21日(土)

場 所：博物館 2階展示室
時 間：14:00~15:00
定 員：200名（立ち見あり）
参 加 費：無料

博物館コンサート NUMCo

「モンゴルの心 馬頭琴」

演奏曲目：「スーホーの白い馬」、「草原の祝福」、他

出 演：サランモル

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

5月25日(水)、11月23日(水)

場 所：博物館野外観察園、
博物館 2 階展示室
時 間：13:00~15:00
参 加 費：無料

博物館野外観察園見学会

講 師：西田佐知子（博物館准教授）、野崎ますみ（同研究員）
内 容：季節の花をみながら自然を学び、電子顕微鏡でミクロの自然を見る



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

5月27日(金)

場 所：日本経済新聞社名古屋支社 3 階
日経栄カンファレンスルーム
(名古屋市中区)
時 間：18:30~20:00
定 員：100名
対 象：一般
参 加 費：無料

国際経済政策研究センター・キタン会 第23回名古屋ビジネスセミナー

講演題目：「最近の世界経済情勢について」
講演者：渡辺博史氏（株式会社国際協力銀行代表取締役総裁）



[問い合わせ先]

経済学研究科
附属国際経済政策研究センター
052-789-4945

表紙サークル紹介



表紙
練習風景（馬術部）
（平成28年3月26日）

馬術部

馬術には、カウボーイが起源の軽快なウエスタン馬術、流鏑馬などに代表される雅な古式馬術、そしてヨーロッパ発祥のジェントルマンのスポーツ、プリティッシュ馬術があります。我々名古屋大学馬術部が日々練習し、習得しようとしているのはプリティッシュ馬術です。今年も全日本学生馬術大会に出場するため、東山キャンパスから遠く離れた東郷フィールドの馬場で日々練習しています。毎日の練習では、馬と一体となって馬場を駆け、障害を飛び超え、それが終われば、馬の手入れの時には長閑に馬とゆったりとした時間を過ごしています。

名大トピックス No.276 平成28年5月16日発行

編集・発行／名古屋大学総務部広報渉外課

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報渉外課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601） TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@adm.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ（<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/public-relations/publication/index.html>）でもご覧いただけます。

169 院校払い下げ騒擾

名大が私立大学になっていた可能性があると言ったら驚かれるでしょうか。今からちょうど125年前に、あるいはそうなったかもしれない事件が起こりました。

1891(明治24)年2月20日頃、浄土真宗三派の管長が連名で、岩村高俊愛知県知事に対し、名大医学部の前身にあたる愛知医学校(当時県立)とその附属病院である愛知病院の払い下げ等を求める請願文を提出しました。

真宗三派がこのような請願をした背景には、明治政府によるキリスト教解禁に対する危機感から、宗教活動の一環として、衛生・教育行政への支援活動を展開しようという意図がありました。また1873年に愛知医学校・愛知病院の前身にあたる病院・医学校を再興する際、県はその費用のほとんどを真宗三派の寄附(信者からの喜捨)に頼っており、歴史的な根拠もあったのです。

愛知医学校の熊谷幸之輔校長は、学問の領域に真宗の干渉が及ばないのならという条件付きでこれに賛成しまし

た。当時の愛知医学校は、この4年前の政府の施策によって財政が危機に瀕しており、県下に多くの信者を持つ真宗が後ろ盾になることは魅力的な話でした。

これに対し、新聞の多くは、愛知医学校は地方税によって維持してきた県の所有物であるとして、払い下げ反対の論陣を張り、多数の県会議員もこれに同調しました。名古屋の開業医も、真宗側が請願の中で貧民の無償診療を掲げたことへの危機感もあってか反対運動に立ち上がり、名古屋医会は県知事、県会議長宛に建議書を提出しました。愛知医学校の学生たちも、京都府立医学校に全員の転入を申し込んだり、全員の退学届を学校側に突きつけるなどの激しい行動に出ました。

結局、同年3月23日に岩村県知事は払い下げの請願を却下し、騒擾は終息しました。もし払い下げが実現していたら、現在の名大は仏教系の私立大学、などという可能性もゼロではなかったのです。



| | | |
|---|---|---|
| 1 | 2 | 3 |
| 4 | | |

- 熊谷幸之輔(1857-1923)。1883年から1916年まで、愛知医学校やその後身の愛知県立医学専門学校の校長を務めた。院校払い下げに賛成したことで、新聞や名古屋医会からは非難されたが、騒擾終結後も県や学生たちから進退を問われることはなかった。
- 岩村高俊(1845-1906)。土佐藩(高知県)出身の官僚。愛知ほかの県令、県知事などを歴任し、貴族院議員、男爵となった。農商務大臣を務めた長兄岩村通俊、自由党領袖の次兄林有造も著名。
- 森鷗外(1862-1922)。作家としてあまりに著名だが、本職は軍医で、熊谷幸之輔とは東京大学医学部の同級生。「熊谷幸之輔君」と題する、この騒擾の経緯を熊谷の立場で書いた手記を残しており、貴重な史料となっている。



4 払い下げの却下を報じる1891年3月24日の『新愛知』(現在の中日新聞)。「正論万歳」として、却下を歓迎している。